
死と乙女

伊佐山詩織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死と乙女

【ZPDF】

Z0825D

【作者名】

伊佐山詩織

【あらすじ】

この家には魔が住んでいる……繊細すぎる高校生たちの切ない一夏。

「余所者」

「という言葉が、私の心に根をはつた日。」

*

夕陽が彩花の頬を照らしていた。

逆光に射られ、産毛が金色に輝いていた。

高等部に入りたてだったあの日、なぜ私たちは音楽室にいたのだ
うつ。

二人で。

*

彩花はピアノに向かい、シュー・ベルトの歌曲集『冬の旅』の第一曲、「おやすみ」の伴奏を何度も何度も繰り返した。

若者が恋人への未練を抱きつつ雪道を去る、その足取りを模した単調で重苦しいリズム。春の夕暮れのけだるさもあって、私は心底その音楽に飽いていた。

「それどんな歌なの？ 歌もちょっとだけ歌つて」

「難しい歌よ。出だししか歌えない」

彩花はそう言つと、出だしの数小節をよく透るソプラノで歌つた。

F r e n d b i n i c h e i n g e z o g e n ,
F r e n d z i e h i c h w i e d e r a u s .

「ドイツ語？」
「そう」
「どんな意味？」
「大体の意味でいい？」
「もちろん」

余所者は、私、ここに来て、余所者のまま、去つていく。

「余所者は、私、ここに来て、余所者のまま、去つていく」
私は彩花の言葉を繰り返した。

このとき、生まれて初めて、私は詩といつものに感動した。
彩花は再びピアノに戻った。歌のない伴奏だけの音楽が始まり、
そしてそれは私の心にいきなり染み入ってきた。私は泣いた。声を
あげて泣いた。

彩花は気づかぬふりをしていた。

*
物心ついてからずつと、余所者だった。

どこか美しい他の世界から、たつたひとり、この薄汚い世界に放
り出された余所者だった。

父は他に住んでいた。なのに葬儀はうちの家でやつた。どこかか
ら運び込まれる棺。

小さな窓からのぞき見た父の顔。

やせ衰えて死んだ顔は土色の皮を被つた骸骨だった。
まだ四十前だった。

そして見た。

庭の銀木犀の裏に、私より少し年上の女の子。

ずっと昔から、よく同じ場所に薄ら笑いを浮かべながら立つてい
た。それに気づいた祖母は千円札を持っていて手渡した。
お金を受け取ると、まるで猫のよつと去つた。

*

なぜあの女の子はいつもここに来るのだろう。
なぜ祖母はあの子にお小遣いを渡すのだろう。
あの子は誰？

「遠い親戚」

「ことじへ。」

黙り込む祖母。

*

祖母のいなことじりで母に聞く。
いきなり平手で打たれる。

そんなことおばあちゃんに聞くな、
そんなこと一度と口にするな、と。

……この家には魔が住んでいる。
と、呟づく。

*

口を開かず。
貝になる。

仮面を被る。

*

余所者は、私。

(続く)

彩花もまた、余所者だった。

けれど彩花は、それを自ら激しく主張しながら生きていた。
ガラスのように鋭く、そして脆かつた。

彩花は言った。

「死にたいって思ったことない？」

私は答えた。

「生まれてこなればよかつた、とは思つ
「それとこれとは違う」

「どこが？」

「死にたいって思うのは、それが復讐だからよ

「そうね。私は復讐したいとは思わないから」

「誰にも？」

「うん」

「私はまだ幸せなのかも知れない」

「どうして？」

「この世を憎んでいられる」

「私は？」

「あなたはすっかり麻痺してる。すべてに」

「麻痺じゃなく、倦怠かも」

「高一で？」

「年齢は関係ない。それに私、処女じゃない」

「いつから？」

「このあいだから

「相手は？」

「祐一」

彩花の目が穴になる。表情の全てが消える。絞り出すように呟く。

「いつから……あなたたち、そつだつたの？」

「わからない。気づいたら抱かれてた」

「なぜ私に言うの？」

「あなたを傷つけたいから。あなた、祐一が好きなんでしょう？」

彩花は絶句する。

「嘘よ彩花。全部嘘よ」

彩花の目がかすかに笑つ。

「やつぱりそうなのね」と確認する私の中に、残虐な気持ちが湧く。祐一はやはり奪わなければならぬ。

*

「コンサート。祐一がバリトンで、彩花はピアノ。「おやすみ」の演奏。

音楽室で聞いた彩花の伴奏だけの方がよかつた。祐一の歌は邪魔。でもそんなことは口にしない。

「よくわからないけど、よかつた」

などと、知つたよくな口を、翌口きく。

「来てたの？」

などと照れながら答える祐一。

プレイが、フィッシュヤー＝ディスカウが、などとひとしきり音楽談義。レコードの貸し借りの約束。ちょっとといい雰囲気。クラスの皆が噂する。隣のクラスの彩花が知らぬ間に、こうして祐一との関係を作る。気づいたときには手遅れの。

*

密室の文芸部室でいきなり抱きしめられる。

自ら罠を仕掛け、お望みの獲物がかかつたといつのに、恐怖で足がすくむ。

硬くなつたまま抱かれる。乾いた唇が重ねられる。

全然甘美じやない。

祐一の手を振り払う。逃げる。

どうしてこんなことになつたのかわからない。

そして泣く。自らを責めて。
(続く)

三

高校初めての夏休み、その初日、今日は親戚と大事な話があるから外に出ているように、と母に言われる。文芸部室で一人勉強することにする。

祐一が来た。

きっと、私を狙つて。

来ることはわかっていた。

それなのになぜ来たのだろう、私はこじる。

*

当たり障りのない会話。友達の噂。先生の話。

じきれる。

来るぞ、と身構える。

「帰る」

席を立つ。

「どうして？」

祐一の目には真剣な光が満ちている。

一瞬、さんざん焦らしたのだし、夏休みだし、いいかな、と思う。もうキスは「めんでも、抱かれるくらい」と一瞬思つ。思うと体が硬直する。動けない。

「俺のこと、どう思つてる？」

「どうつて？」

「好きか、嫌いか」

「そんな。どっちでもない」

「じゃあ、どうしてこの間は……」

「やめてー。」

思い出したくない。聞きたくない。どうしてあんなことを言葉にしたがるのだね。う。

ドアの取つ手を握る。立て付けが悪く、なかなか開かない。悪戦苦闘しているうち、祐一が後ろから近づいてくる。肩に手が触れる。もう駄目だ、と思つ。鞄を床に置く。

*

キスさえもないただの抱擁。男の体の重さ。腕をまわすべきか。このままで下げておるべきか。

思い切つて祐一の腰に手を回す。

抱きしめられる。

息が出来ないほど。

前とは全然違う。ときめきと、安らぎ。こうしたかったのだ、との、確信。

ふと、自分は生きていいいのだ、と気づく。満ち足りて、腕をほどきながら、次の瞬間、唇が重ねられる。固い感触。すぐに離れる。

「ありがとう」

なぜ礼を言うのかわからない。でもそれ以外、思いつかない。自分も生きていいい、一人の人間なのだ。それを教えてくれた祐一へ、もういちど

「ありがとう」

でも、今はとても一緒にいられない。ドアは、今度は素直に開く。

*

家路は夏休み初日だからだけでなく、輝いている。輝きが、涙できらめく。

私は抱かれるだけの価値がある。

抱くだけの価値があると思つてくれる男がいる。

祐一のことが好きだ、と一瞬思つ。

家路を急ぐ。

早く自分の部屋でこの想い出に浸りたかった。

*

なぜ今日、家を出されたのか忘れていた。

「ほーう、Ｋ学院ですか」

仏間に居た若い男は、私の制服姿を上から下まで舐めるように見て、嫌みな口調で言った。

隣にはあの女の子が、奇妙にケバケバしい化粧をして座っていた。

「この子は高校へも、やつてもらえなかつたんだ」

母が私の所に飛んできた。

「なんで帰ってきたの」と低い声で。

「私たちは構いませんよ。お嬢さんも一緒にいてくれた方が、これからのことも話しやすいんじゃないですか」

祖母が苦しそうに呻いた。

「さ、これで何か食べに行きなさい」

母は私に千円札を渡す。

「これまでこの子も、そんなはした金で追い払ってきたんですよ」と男の太い声。生まれて初めて聞く、心底の悪意に満ちた声。本当の恐怖。

「お嬢さん、ダメですよ、あなたもそんなはした金で追い払われちゃ

「さ、早く

苦しそうに歪んだ母の表情。

千円札を握りしめて玄関を飛び出す。

*

もう一度やつてきた文芸部室には誰もいない。

すべては錯覚だったのかもしれない。

私には待たれる価値など無かつたのだ。

幸福など、私にはありえない。

魔の宿る家。魔の宿に住む私。

消えていく幸福を、肉体に残る幸福の名残を、今度は一人、抱きしめる。

(続く)

四

夏休みに入つても、夏はやつてこなかつた。梅雨はあけることなく夏休みに入り、学校の側の溝はずつと茶色の水にあふれていた。ただ、夏休みに入ると雨は小降りとなつて、溝の水は澄まないまでも水位を下げた。

*
休みに入つて一日目、文芸部室をノックする音がした。開けると彩花だつた。祐一と抱き合つていてることが空気を濃厚にするのかも知れない。あまりの息苦しさに彩花の目は私たちを探つていた。

「ふたり?」

「そう」

私は冷たく言つた。たつた今までキスしてたのよ、といつ目をして。

「ねえ、溝に、人形が沈んでるんだけど」

「人形?」

「家庭科室のマネキンだと思うの」

「誰がそんなとこに」

「ねえ、祐ちゃん、見て」

祐一はゆっくりと立ち上がつた。

「こつち

彩花について祐一は出でていつた。私も続いた。

*

溝の底にある人形はうつぶせになり、流れ着いたゴミが制服の上に被せられていた。

「これは人だ」

祐一は言つた。

「当直の先生に連絡しないと」

祐一は走つて去つた。

私たち一人が残された。

「人？」と彩花は言った。

「これが人？」と私は返した。

だとしたら、なぜこんなところに転がつているのだろう。人なら人らしく、しっかりと起きあがりなさいよ。

髪の生え際を泥水が舐めていた。粟粒が浮かんでいた。毛穴など、人形にあるはずがない。

「見て、うなじの生え際」と私は言つた。返事はなく、沈黙の後、彩花は側の植垣にうずくまり、吐いた。咳き込みながら、何度ももどした。

教員と祐一が走つてきた。私は彩花の肩を抱きながら、水道のあるところへと歩いた。

*

パトカーと救急車の音が近づいてきた。

警官が来て、部室に寝かせていた彩花を連れて行つた。

*

彩花と祐一は、もう夕暮れになつて、部室に戻つてきた。
三年生の女子が行方不明になつていて、多分その子だらう。事件性も考えられる。

警察から聞いたことを祐一は言つた。

彩花は黙つていた。

*

今日は一人になりたくない、と彩花は言つた。

「ここで徹夜しようよ」

「三人で？」

「うん」

「俺は帰る。こんな所にいたら、警察に怪しまれる」

「じゃあ、彩花、ウチに来る？ 泊まるよ」

彩花は、うん、と小さく言つた。

*

夕食は私の部屋で一人でとつた。交代で入った風呂上がり、ベッドの端に並んで腰掛けると、私と同じシャンプーの香がした。

「祐ちゃん」と、出来るの?」と彩花は言った。

「そうよ」と私は冷たく言つた。

死体を見せられて私はひどく残虐な気持ちになつていた。

「いつから?」

「六月の終わりに一度キスした。昨日も今田も部屋でキスした」

「そう」

諦念のため息に近い返事だった。それに続けて彩花は言つた。

「女にも、性欲つてあると思う?」

「性欲?」

彩花の目を見て、私はゾッとした。口元は笑みながら、目は全く笑つていなかつた。彩花もまた、残虐な気持ちになつっていたのだろう。

「あるんじゃないかな」

「好きだつていう気持ちと、性欲とは同じ?」と彩花。

「わからない。彩花はどう思う?」

「私は経験がないからわからない。あなたは経験があるでしょ」「経験?」

「祐ちゃんと」

「こんなの、経験の内に……」

「あなたのはただの性欲よ」

彩花は私を遮つてピシャリと言つた。

「何?」と私は驚いて返す。

「あなたは祐ちゃんを好きじゃない。そんのはただの性欲よ」

「どうしてそんなことが言えるの?」

「私にはわかる。あなたは祐ちゃん」ときを好きになれるような人じゃない

「祐ちゃん」とき?」

「小さい頃から見てて知ってるの。あれは肩よ。あなたの相手じゃない」

「買いかぶられたものね」

「じゃあ言ってみて。祐ちゃんのどこが好きなの?」

絶句する。

体が、としか言えない。祐一とは挨拶さえ煩わしかった。

「言ってみてよ… どこが好きなのか」

「あんなの嫌いよ。本当は」

「ほら、そうでしょ」

「なぜわかったの?」

私にもわからなかつたのに。

「あなたは自分を罰しよつとしている。つまらない男に身を任せようとしている。あなたは自分を愛していない。だから他人を愛せるはずが……」

「彩花だつてそうでしょ…」と、堪らず、言い返す。

「そうよ。だから解るの。あなたは人を愛せない」

「彩花、祐一のこと好きなんじや……」

「小さい頃からペアにさせられてたから、愛しくは感じる。でも今、はつきりわかつた。あなたに對しては全然嫉妬を感じないの」「嫉妬を感じる価値がないほど、私がそれくらいつまらない女だつてことじゃないの?」

「違う。むしろ祐ちゃんに嫉妬してる。あなたとキスしたなんて」

「どうこうこと?」

「あなたは特別なのよ」

「わからない。

「貴族なのよ」

「貴族?」

「あなたにはわかつていたはずよ。この世界と、自分と、どちらが

尊いか

わけがわからない。

「私たちはね、この世の住人じゃないの。もつと他の、本当に美しいところから来た人間なのよ。ね、そう感じたこと、あるでしょうなづくほかなかつた。

「私たちは、苦しむべくして苦しむのよ。これは貴族の特権なの。祐二なんかとは違うの。私たちは選ばれているのよ。この苦しみは選ばれたものにしか与えられないの」

「どうして彩花は……」

「あなたは鈍いわ。自分の才能の在処を知らない。磨けば玉になる才能なのに」

「何の？」

「人間？」

「文章とか、音楽とか、そう言つと思った？」

「うん」

「そんな発想はすでに精神的な庶民よ。いわゆる才能とやらが世間に役に立つか立たないかで自分を切り売りしなきやならない哀れな庶民の発想よ。貴族つていうのはね、全人格的存在なのよ。あれが出来る人、これが出来る人、とか、そんなんじゃない。そこにいる、それだけで尊い人格なのよ、わかる？」

「それはわかるような気がする」

「あなたは貴族なの。私と一緒に」

言葉がとぎれ、私たちは見つめ合つた。

記憶の中の死体が私たちを結びつけた。

私たちは唇だけを、漫画の中の小鳥のように、一瞬、合わせた。驚いて、すぐに離れ、そして、起こってしまったことの恐怖からか、彩花は極端な早口になつた。

「男を好きにならなければならない必然性なんか、ない。そんなのは自然が勝手に決めたことで、人間はそもそもが自由で、誰をどんな形で好きになろうと、自由で、もともと不自然なのよ、だから、誰をどんなかたちで好きになつたとしてもかまわない。そう思わな

い？」

私はすぐに返事せず、彩花をじっと見つめ、そして言った。

「自然がどうとか、それは彩花の理屈よ。あとからつけた理由よ」

「だから？」

「彩花は私のことが好きなんでしょう？」

「好き？ 好きってどうこいつ」と

わからない。

「あなたにはわからないはずよ。あなたは人を愛せない人だから」

「彩花はどうなのよ」

「もちろん、あなたが好きよ。あなたもわかつたはずよ。私が好きつて」

「わからない。でも、虧めたいとは思つた。虧めたくて、祐一を取り上げたの」

「やつぱりね。でもおあいにく様でした。ぜんぜん悔しくないの」

「残念ね」

彩花は目を閉じ、唇を差し出した。私も応じた。

*

「祐ちゃん」と、どっちがよかつた？」

「わからない。別物だと思つ」

「別物ね。そうかも知れないわ。で、どこのが別なの？」

「何もかもよ。祐一の時はドキドキと安らぎが半々だった。今はまだドキドキしてるから」

「私にも、祐ちゃんと同じよつて、して」

「出来ない」

「どうして」

「彩花に対して失礼だから」

「じゃあ、私に思い切りキスして」

「私たちは抱き合ひ、唇を重ねた。さつきは閉じたままだった彩花の唇が今度は少し開いた。震える舌が応じてきた。けれど私の舌に触ると驚いたように引っ込め、そしてまた怖ず怖ずと応じてきた。

*

彩花も怖がっている。それがわかると彩花がたまらなく愛しくなる。ベッドに横座りのキスではなく、きちんと正面から抱き合った。抱きしめつつ、正面になるよう、そのまま押し倒す。彩花が一瞬気を失つたのがわかる。

*

「私とあなたは特別よ」と彩花は私の腕枕の中で言った。「何をしたって許されるのよ。さあ白状して、私の方がよかつたでしょ？ あなた、すっかり夢中になつてたわ」

「彩花だつて」

「そうよ。私は隠さない。よかつたわ。だからちょっとだけ気が遠くなつた。どう？ あなた、祐ちゃんのときもこれほど夢中になる？ ならないでしょ？」

「だつて……」

「当たり前よ。私たちは特別な」

抱き合ひながら、私たちは話し合い、話がどぎれると唇を重ね、満足するとまた話し始めた。お互いの寝顔が見たくて、意地になつて、お互い起きていた。

離れるとすべてが消えてしまいそうで、朝が怖かつた。それでもいつのまにか寝入つていた。

*

朝、どちらともなく目を覚まし、キスした。夜、一人とも歯を磨いていなかつたから、口が猛烈に臭かつた。

「人の口は臭い。よくわかつた」

「本当。百年の恋も冷めるわ」

*

朝食は、祖母と、母と、彩花と四人でとつた。気まずかつた。隣のクラスで、同じ文芸部員で、などと、いくら言つても、彩花との関係を上手く説明できなかつた。本当の関係、タベ出来た関係を説明できるはずもなかつた。

食後、居間にいつもの朝のコーヒーが出て、祖母が新聞を差し出した。

「行方不明のＫ学院生 他殺？ 学校横の溝に」との文字が田を射た。

「他殺」と私は言った。

「可愛そうにね」と母は言った。「殺されるなんて」母には昨日の死体のことは話していなかつた。

「うらやましい」と彩花は言った。

ギョッとして、祖母と母と私は彩花を見た。

「殺されるくらい激しい感情をぶつけられる。うらやましい。そういう思わない？」

*

「面白い子ね」

彩花が帰ると母は言った。

「でも、危険よ。ああいつタイプは崩れ出るとキリがないからね。友達になるにはそれなりの覚悟がいるよ」

そんなの、早く言ってほしい。

「男の子にものてるでしょ、あの子」

「男の子にも、女の子にも避けられてる。どっちかといつと」

「そう？ そうかもねえ、あんたも距離を置いた方がいいかもよ」もう遅い？。

それともまだ引き返せる？

でも、あんなことはタバ限りにする。プラトニックな親友になる。

「それはそうと……」と母は口調を変えた。私は心の中で身構えた。「おとといの男の人と女の子」

来た、と思つた。

「何でもないからね。どこかで会つても、絶対に挨拶なんかしないでね」

どうして？ と聞けない。

……この家は魔の宿り……。

返事もしない。

ふい、と自分の部屋に逃げる。

ベッドに倒れ込む。

彩花の残り香……？

(続く)

五

突然生理になつた。
夕べでなくてよかつた、と一瞬思い、自分で頬が紅くなつているのがわかつた。

整理できないほどの大事件が立て続けに起こつて、体がたぶん、処理し切れていないのだと思う。体の抗議。
おととこと昨日、祐一と抱き合つてキスした。

昨日は彩花とも抱き合つてキスした。

死体を見た同じ日に。

なんという恐ろしいことを。自分はなんといつ恐ろしい女になつてしまつたのだろう。同じ日に二人と。男と女。しかもどちらも本気だつた……。

家に住む魔、そして溝に沈んだ女の子が、私を狂わせた。そう思いたい。

思いたいけれど、きつと違う。あれはきつかけにすぎない。あれはただの鍵で、私はその鍵を待つっていたのだと思う。開けてもらいたかったのだと思う。

「あなたのはただの性欲よ」

恐ろしいことをさらりと言つた彩花。

性欲だつたのか？ それならなぜ祐一でなくてはならなかつたのか。

わからない。

でも、自分が抱かれたいと思ったことは確かだ。

嫌いなのに、抱かれたい？

ただの性欲だから？

ちがう、と思う。

彩花のことは好きだと思つ。

それでも、もう抱きたいとは思わない。

昨日のはただの事故。

けれど、キス以上のことを、私がもし知っていたら……
だめだ。

想像できない。したくない。

けれど、たぶん、知っていることはすべて、彩花相手にもしただ
らうと思う。

タベの数十回のキス以上のことを。

いやだ、と頭を振る。否定する。

そしてふと思い出す、おととい、うちに来た女の子。どう見ても、
まともじゃない。なぜあんな人間たちがうちの家に出入りしている
のだろう。

なぜ？

ずっと昔から見慣れていた、あの女の子の薄笑い。

あの子は誰？

聞けない自分が悔しい。

恐ろしい女になつた自分が恐ろしい。

*

そして三日間、何もなかつた。どこへも出かけず殊勝に机に向か
つていた。

勉強が忙しかつたのではない。祐一と彩花、どちらから先に連絡
があるか、心の中で賭けていた。どちらが先だつたからどうという
のではない。ただ、二人を試してみたかった。私の不在に、どちら
が長く耐えることができるのか。試したかった。

*

例の水底の女の子のことで新聞やテレビが騒がしかつた。
すべて見ないようにしていた。

母親には彩花が帰つた後、一応言つた。

「それあの子、泊まつていつたのね」
と、奇妙に納得していた。

*

ふと、試されているのは私なのではないかと気づいた。
「」のままもし一人で放つておかれたら、私はびじりに電話するの

か。

* 私が求めているのは、どちらなのか。

*

彩花から電話があった。

学生三人が逮捕された、と彩花は言った。

リンカン、と耳で聞いただけではわからなかつた。

漢字を聞き、輪姦、という言葉を初めて知つた。

*

「逃げ出して溝に落ちたらしいね。みつともない最期、無様よ」
そんな言い方もないんじやないか、と思う。

けれど黙つてている。

この悪口は川底に沈んだこの女の子への、彩花なりの追悼なのだ、
と思つ。

そういうことが、この前の夜に、わかつた。

悪口も懐かしい感じがした。

「犯されたつて、輪姦されたつて、私たちは毅然としていようね」
「毅然と？」

「川に流されるなら、オフィーリアみたいに」

「綺麗すぎる」

「綺麗でいたいの。最期まで自由にね。私たちは自然を超えてるの。
男なんて、ただの自然よ。砂糖に群がるアリを誰も非難できないで
しょ。悪いのは砂糖をこぼした人間よ」

「私たちは砂糖？」

「どうしようもないアリたちのなかにわざわざこぼされた、ね」

「男が嫌いなの？」

「べつに。好きな男もいる」

「お父さんは？」

「嫌つ対象にもならない」

「お兄さんは？」

「そうね、嫌つてあげてもいい。あなたじゃ、お父さんの記憶はあるんでしょう？」

「ない、とは言えない。」

「小学校の帰り道で、たまに待ち伏せしてた。元気かつて。段々目が鋭くなつて、怖かつた。死んだときもそんなに悲しくなかつた。居るのか居ないのかわからなかつた人が、やっぱり居ませんでしたつて感じかな」

「離婚？」

「じゃないと思つ。出ていつただけ」

「女？」

「よくわからない。お母さん、黙つてるから」

「聞きなさいよ。もう高校生なんだから」

「聞いたりして、嫌なことを聞かされたら嫌だから」

「私たちひとつで、この世で生きていく」と以上の嫌なことがある？」

「文芸部室のドアがノックされた。祐一が入つてきた。この男とも三日ぶり。ちょっと懐かしい。」

「ふたり？」と聞く。

「見ればわかるでしょ」と彩花。

「何してるの？」

「話、話、話」

じれている祐一。気持ちが手に取るようにわかる。

「またあれから警察が、家にまで来た」

「そう」と、彩花はこれ以上ないほど冷たい口調でつきはなす。

「そつちには来なかつた？」

「私はあの夜、お泊まりだつたから。ねえ」と私に同意を求める。「ねえ」と私も乗る。

「そうか」

「帰らうか？」と彩花は私に。断れないような口調で。

*

彩花の家。彩花の部屋。本棚をはみ出し、天井にまで横積みになつた猛烈な量の本。

「彩花、これ全部読んだの？ すごい読書家！」

「まさか。兄貴のよ。置き場がないから置かせてくれつて」

「お兄さんが読書家なんだ」

「読書家なだけよ。大学で学生運動なんかしただけで、世の中のことを知つた気になつて。でも、人間については何もわかつてない。何よりだめなのは、マザコンだつてことよ」

「マザコン？」

「母親べつたり。あんな母親に」

「彩花、お母さんにも文句があるのね」

「文句？ あるわけないわ。私にとつては完璧な母親よ。感謝してるくらい」

「だつたらなんで？」

「すぐにお茶持つてくれるって言つてたから、見るとこいわ。昼間から酔つてるのよ」

「酔つてる？」

「アル中つて」と

*

お茶とゼリー菓子を持ってきて机に置くなり、彩花の母親はベッドの上に座り込んだ。酒に酔つた女性を見るのは初めてだつた。

「彩花はね、気が弱いんですよ。そう思いません？」

「そうですか？ むしろ気が強い方じや」

「そんなことは、ありません。気が弱いんです

「そなんですか」

「小さい頃からね、ちょっとしたことを気にして、泣くんですよ」

「よく泣く子だったんですね」

「そうそう。気が弱くてね。そう思いませんか？」

「こえ、今じや、気が強い方だと思います」

「小さい頃は気が弱くて、いつも泣いて泣いて困ったんですけど、今は泣きませんか」

「泣いたところは見たことないですね」

「昔はよく泣いたんですよ。気が小さくて。今だつてやつてしまふ」

「いえ、今は気が強いですよ」

「そんなことはありませんよ。小さい頃は気が弱くて、いつも泣いて泣いてるような子だったの」

「今は、結構気が強い、よね」と彩花に助けを求める。

無視される。

「気の弱い子で、お兄ちゃんにいつもついてまわって、いたんですね」

「お兄さんとは仲よかつたんですか」

「今だつていいんですよ。昔はね、この子の気が弱かつたから、よけいよかつたんでしょうへ」

「やつでしょ、ううね」

「やつなんですよ。気が弱くて。よく泣いて、泣いて」

「今は全然泣きませんけどね」

「友達が遊んでくれないと泣つては泣き、ちょっと転んだと泣つては泣き、いつも泣いてたんですけどねえ」

「今は結構気が強いほうですよ」

「お兄ちゃんも終りには面倒くさくなつて、そんなに泣いてると、そのうち田から水がなくなるぞつて」

「お兄さんはおもしろい人なんですね」

「この子は気が弱いんですけどね、あの子は……」

「お母さん」と彩花が冷たく言った。「私たち、これから勉強するんだけど」

「あ、ああ、『めん』と彩花の母親は、ベッドから『めん』のよつに滑り降りると、床に手をついてよろみと立ち上がった。
「『めん』と部屋のドアを強烈な音を立てて閉めた。

「家はもう、あの女のせいで無茶苦茶よ」と彩花は吐き捨てるよつに言った。

「完璧な母親じゃなかつたの?」

「見ての通り、完璧じやない。完璧すげて、死ぬほど嫌なの」

*

彩花の腕。

唇。

もうしない、と決めていたのに。

柔らかい体。口ロンの香り。彩花の髪に顔を埋める。

心地よい、とは思つ。でも違つ。

生理中だから。

ふと思つ。祐一はまだ部室にいるだろつか。

*

彩花がトイレに行つたすきに、ちよつと机の引き出しを開けてみる。

ずっと前の家族写真。母親と、父親らしき男性と、小学生の彩花と、そして、見たことのある若い男。

急いで引き出しを閉じる。

恐怖に胸が高鳴る。

彩花が戻つてくる。

「どうしたの?」と雰囲気に気ついたのだろつか。

「お兄さんって、どじかの学生?」

「K大」

「賢いんだ」

「さあ。成績はよかつたからね」

「それに、きっとハンサムなのよね」

「どうして?」

「彩花のお兄さんだから」

「そんなことない」

「ねえ、写真とか、無いの? 最近の

「あつたかなあ」とガラス戸の本棚からアルバムを出す。
「これが比較的新しい。大学入学の時の写真よ」
のぞき込み、間違いない、と確信する。

恐怖で頭が真っ白になる。

「どうしたの？」

「お兄さん、いつも帰つてくるのは遅いの？」

「遊び歩いてるから、深夜が多いけど。どうしたの？　会つてみたいの？」

「うん、と首を激しく振る。

じゃあ、と彩花はアルバムを閉じる。続きをしよう、とでもいうような仕草で私の手を取る。むしろありがたいと思つ。顔色では気取られても、キスで気づかれることがあるまい。わざと激しくする。醒めきつた心で。

（続く）

「電話よ、男の子から」

母の声。

祐一だつたら嫌だな、と思つ。

そしてやはり祐一。どうして家になんか電話していくのだらう。

「なんでしょうか」とわざと丁寧に聞く。クラスの連絡網か何かと「まかせるよう。

「彩花と、仲良くなつたのか?」

「は?」

「明日、文芸部室に来てくれ

「何時でしょ?」

「十一時」

「はい、わかりました。十一時から会議ですね」

「なんだよ、それ」と怪訝な口調で聞いてくるのを無視して、

「じゃあ、また明日」

などと素つ氣なく切る。

「何?」と母が聞く。

「文芸部の会議だつて」と答へ、部屋に駆け上がる。

ふう、とため息をつく。

明日、また祐一と抱き合つことになるのだらうか。

もの「」とがあまりに急に進みすぎる。

それでも、なぜ彩花の兄が、と考え……一瞬、あまりの思い

つきに自分ながら恐怖する。

祐一に聞く!

祐一なら、彩花の兄がどういふ人間か知つてゐるはずだ。あの女子との関係も、もしかしたらわかるかもしねり。

そうしたら、なぜ彩花の兄が、あの女の子を連れてつりやつて

きたのか、そもそも用件はなんだつたのか、糸口へりこはつかめるかもしれない。

たとえ、つかまないほうが幸せな糸口だつたとしても、つかんでみたい。

つかまなければならぬ、と思つた。

*

十一時の文芸部室、祐一は撫然と座つていた。

「彩花から、何か聞いたか?」と、入つてきた私の顔も見ずに言つた。

「何を?」

「俺のこと、とか」

「聞かないよ。どうして?」

「なんで俺を避ける」

「避けてなんか、ないよ」

「じゃあ、と祐一は立ち上がる。

「何よ」と私はひるむまことに言つ。

「彩花は狂つてる

「いきなり、何?」

「おまえ、あいつの言つこと、理解できるか?」

「できるよ」

「嘘だ」

「あなたに無理だからといって、他の人も……」

「俺には理解できる。あいつがああ言つことは理解できるってことだ。内容の理解は別だ」

「同じよ。私も」

「たとえば、あの死んだ三年生の女子のこと、なんて言つてた?」

「みつともない最期、無様だつて」

「おまえ、そんなこと、言えるか」

「言えないわよ、絶対に」

「だら。あいつは狂つてる。あいつの言つことなんか、聞くくな

「なんあなたに命令されなきゃならないの
「俺はおまえのことを考えて言つてるんだ」

「よけいなお世話よ」

「じゃあ、俺のことは、なんて言つた?」

「肩。とは言えなかつた。

「わたしにはふさわしくないって」

「チクショウ、あいつ」

無表情だった祐一の顔が怒りの皺に刻まれた。これほどまでに感情をむき出した男の顔を初めてみた。

「で、何だつて? 俺とは別れると?」

「そんな話はしてないよ

「したはずだ」

「してないよ」

「チクショウ」と祐一は壁を殴つた。プレハブの部屋が揺れたようだつた。

「やめてよ!」

怖い、と言つよつ、氣味が悪かつた。

「おまえ、俺のこと、どう思つてる?」

「どうつて?」

「好きか、嫌いか

「嫌いだつたら、こんなところにこない

「これが精一杯の答えだつた。

少しだけ、雰囲気が和んだよつだつた。

「ちょっと聞きたいんだけど」とこちらから話題をそらした。「彩花のお兄さん、知つてる?」

「清一さんか?」

「名前は知らないんだけど

「知つてるけど……」

「どんな人?」

「昔はまじめな人だつた、と思つ。だんだん彩花と同じに狂つてい

つた。噂じや、K大にもあまり行つてないらしい。学生運動して、女のところに入り浸つて」

「女?」

「なんか、良くないところにしつとめてる女らしいけど、良くないところ?」

「わかるだろ?」

「ほかには?」

「それだけだよ。なんで?」

「なんでもない。それより、なんで私を呼びだしたの?」

「呼び出した! なんだよ、その言い方は」

「だつて、電話までかけてきて、呼び出したんでしょ?」

「毒を含んだ私の口調に、祐一は気の毒なくらい、しおれた。

「俺はバカだ。おまえらがよく知つての通りだ」

「何よ、急に?」

「難しい話もできない。気取った話も」

「だから?」

「人に自慢できるのは、声楽だけだった。初めて、同級生でほめてくれたのがお前だった」

「それで?」

私は素つ気なくするのに苦痛を感じ始めていた。心底、祐一が哀れだつた。

「キスも初めてだった」

「私もよ」

「本當か?」

「本當よ。あなたにもわかつたでしょ?」

「わからない。俺には何もわからないんだ。彩花、あれはなんだ。女か? 俺に言わせれば、あれは、化け物だ」

「彩花は特別よ。あんな人は二人といない」

「おまえもそう思うか」

「思つよ。誰だつて」

*

……いつのまにか祐一に抱かれていた。髪をなぞられていた。男の体の固さが心地よかつた。頬つていいのだ。預けていいのだ。心地よい香りではない。けれど、このほうが、今はよかつた。学生服で抱かれる陳腐さも仕方がない。私だって制服なのだから。

「好きだ」

「……」

「嫌いか？」

「ううん、と祐一の胸で首を振る。

「好きか？」

「うなづけない。

でも、顔を上げ、目を見て、目を閉じ、唇を求める。柔らかくない。無精ひげが痛い。汗臭い。でも、いい。もっと欲しいと思つ。彩花にはこんなこと感じない。時のたつのを忘れる。

*

「このあいだはね、彩花の家に行つたのよ」と、抱き合いながら私は言つた。相手が祐一でも、顔さえ見なけば、なんでも話せそうな気がした。

「うん」

「彩花のお母さんに会つたの」

「綺麗な人だろ」

「わからない。まだお昼なのに、お酒に酔つてた」「酔つてた？」

「もうふらふらで、話もよくわからなかつた」

「あの人ガ?」

「なんか、彩花もめんどくわせつにしてた。私も話しかけられて嫌だつた」

「昔はすぐ綺麗な人で、小さい頃、発表会で、いらっしゃましかつた。あんな綺麗な母親がいるなんてつてね」

祐一は私の髪を梳くよつになぜた。心地よかつた。

「お母さん、彩花に似てるね」

「冷たい感じはね。でも彩花はむしろ父親似だよ」

「父親はどうしてるんだろ。お母さんがあんな状態なのに」

「さあ。最近は会つたことないから、知らないなあ」

足音が聞こえて、離れ、急いで椅子に座る。部室の戸がノックされる。一年生の先輩が入つてくる。入つてくるなり、

「ねえ、あんたたちが第一発見者だつて、本当?」

「厳密には彩花なんですけど。通報したのは僕で」

「その彩花なのよ! 彩花のお兄さんも事情聴取されたんだつてそんなこと聞いてない! と声を出しそうになつた。

「清一さんが?」と祐一。

「そつららしいの。あれつて、内ゲバカリソーチかもしれないって言われてるんでしよう。三年生の人、有名な活動家で、K大の社研にも出入りしてたらしいの。彩花のお兄さん、K大社研の大物ですよ。それで、事情聴取されたんだつて」

「清一さんなら、もしかしたら「

「でしょ?」

「さつきもちよつと話題になつてたんだけど……」

話を打ち切つて、すぐにも彩花に会いたかった。「内ゲバ」だの「セクト」だの、何も聞いてない。でも彩花は知つていたはず。なぜ輪姦なんて嘘をついたの? こんな、すぐばれるような嘘を。彩花のお兄さんは、それで? とおれるおれる聞く。

「別に逮捕されたわけじゃないらしいの」

「じゃあ

「事情を聞かれただけだつて話なの」

「それはどこから?」

「K大に行つた先輩から」

そして一年の先輩の口から、他人の憶測と偏見がとめどなく流れ出してきた。彩花の兄が人からどう思われているかよくわかつた。

先輩も、あのクソ生意氣な彩花の兄が犯罪に関わっているかも知れないことに満足げで、お皿のラーメンを私たち二人にオゴると言い出した。

祐一と二人御馳走になつた。

*

「らしいわね」と彩花は軽く言つた。

「らしいわね、つて、そんな簡単なこと?」

「簡単なことよ。え? 何か問題があるの?」

「私に嘘をついた」

「嘘?」

「輪姦だつて」

「それは……」と彩花は軽く笑んだ。「私の想像よ

「想像つて……」

「リンチでも内ゲバでもいいのよ、別に」

彩花は狂つてゐる、という祐一の言葉を思い出した。

「お兄さん、事情聴取され……」

「ああ、そのこと? うちにも警察が来た。私、第一発見者で、家にいなさいつて言われてたのに、あの夜無断外泊でしょ、おまけに兄貴のこと也有つて、一日中、刑事が居着いてた。刑事つて、嫌ね。根ほり葉ほりで、あなたの家にまで電話したのよ。刑事から電話があつたかどうか、お母さんに聞いてみたら?」

「もういい

「で、何が知りたかつたの?」

彩花のお兄さんのこと、とは言えなかつた。それでは何をしに彩花の家にまで来たのか。

沈黙を挑発と勘違ひしたのか、もう彩花の手は伸びてきて、私の髪を耳に搔き上げていた。

今日は本当は嫌だつたのに。

祐一の感触が消えそうな気がして。

でも逆らえない。

柔らかい手が髪を梳き、頬を滑る。

指が唇に触れる。

「愛撫」と彩花が耳元でささやく。

「これが愛撫なんだろうか、とふと思つ。彩花の手が私の胸に伸びる。

いや、と黙つたまま手を突き放す。

「どうして？」

「いや」と、やつと叫ぶ。

「じめんなさい」

抱き合つ。唇を重ねる。

けれどさつきのわだかまりが消えない。

体が固くなる。

彩花は何をしようとしたのか。

固くなつたままの私を今日は彩花が押し倒す。

大胆な唇と舌に、やつと感じる。

胸を、彩花が触つているのがわかる。

口をふさがれ、抗議できない。

まあいいか、減るもんじやないから、と半分あきらめる。

体の固さがぼぐれてくる。

「おい、彩花！」

突然目の前のドアが開く。彩花の重さに跳ね起きることもできな
い。彩花が起きあがる。私も起きあがると、あの男ー、目が合つ。
私と目が合つ、驚愕した男の顔が、一瞬、笑む。

「失礼！」

ドアが閉まる。

「バカ！」と枕が飛んでドアに打ち当たる。

あまりの恐怖に、体が固まる。湿つた口の回りを手の甲で拭つ。
帰る、と、やつとの思いで叫ぶ。彩花も引き留めない。

(続く)

七

登校日。

夕べは食事もろくにとつていなかった。夜も眠れなかつた。朝はもちろん抜いた。

教室に祐一がいるのが不思議だつた。例の第一通報者として、話の輪の中心で得意げになにやら話している。

抱き合ひ、口づけを交わした男が同じ教室にいる。何の不思議もないのに、何か奇跡のようだつた。

祐一は私にとつて何なのか。

恋人？ 好きでもないのに？

友達？ 友達は抱き合ひてキスなどしない。

彩花が廊下から私を呼んでいる。

これもまた奇怪なことのように思われた。

私たちは何なのだろう。

恋人？ 女同士なのに？

親友？ 親友は抱き合ひてキスなどしない。ましてや胸を触らせたりしない。

教室には「これだけの男と女があふれているのに、どうして祐一と彩花なのか。

わからない。

考えられない。

*

「昨日は『めんなさい』

「なんのこと？」と私は素つ気なく言った。一夜の動搖と恐怖を気取られてなるものか、と意地にもなつていた。腕を組んだ。胸を守りうとするかのようだ。

「昨日のこと」

「お兄さん、死ぬほどびっくりしたでしょうね」と私はまた素っ気なく言った。

「ノックぐらいしかって、あとで言つておいたから」

「そう」

「許してくれる?」

「何を?」

「私を」

「彩花の何を?」

「前にも言つたと思うけど」と彩花は静かに言つた。「私たちは貴族なの。だから、不可分の、一個の、全体的人間なの。許すついたらすべて許すのだし、許さないなら、全部の拒否よ。私たちは自分を切り売りしたり、分割したりするような庶民じやない」

「許さないって、言つたら?」

私はまた残虐な気持ちになつていていたのだった。

「ここから飛び降りて死ぬわ。あなたの拒絶は、私の全否定よ。存在の全否定。だから死ぬわ。何の躊躇もない」

彩花もまた、残虐な気持ちになつていたのかもしれなかつた。

「あなたがひしやげて死ぬところを見てみたいけど」と私は言つた。

「それはまだ後にする。とりあえず今日は許すわ。で、お兄さん、びっくりしたんでしょうね」

「目が醒めるくらいかわいい子だつて、言つてた。褒めてるつもりなんでしょう?」

「そう」

*

立つていられないほどの恐怖に襲われた。

目の前にいるのは、あの男の妹。

彩花はどこまで知つていい?

あの女の子を連れてうちの家に来たあの男。

祖母と母親のあの恐れ方。

ホームルームの始まりを告げるチャイム。めまいがする。立つていられない。

*

保健室。

一時間寝て、保健の先生に買つてきてもらったジュースを舐める
と頭が冴えてくる。

「生理、終わりかけだつたんでしょ。だめよ、食事ぬいたりしちゃ
「はい」とおとなしく言う。

「痩せようとか、してる?」

「いいえ」

「ちゃんと食べなきゃ」

「はい」

すべてのことに体が抗議している、のだと思つ。好きでもない男
とキスしたこと。女とキスしたこと。胸を触らせたこと。その女があ
あの男の妹だつたこと。あの男に現場を見られたこと。これらのです
べてを体が拒絶している。

「あなた、あの事件の通報者だつたの?」

「通報はしませんけど、見ました」

「かわいそうにね。あの子、頭良くて、正義感も強かつたから、心
配はしてたの。危ないとこに行つてるなつて

「危ない所つて?」

「学生運動つて、いろいろあるでしょ。変なところだと、対立セ
クトとの内ゲバとか、セクト内のリンチがあつたりするからね」

「危ないとこりだつたんですか?」

「K大の社研つて、アナキスト系セクトの拠点でしょ。有名なの

よ

「K大、社研」

「知つてる?」

「友達のお兄さんが……」

「もしかして、清一君?」

「知ってるんですか？」

「こここの卒業生よ。あの子も真面目すぎるのね。たしかに頭はすぐ良かつた。抜群に。でも、何か、ちょっとしたことが欠けてる感じがした。あぶなっかしくて」

「妹もそんな感じ」

「ああ、彩花さんでしょ。こここの常連よ」

「そりなんですか」

「頭痛いとか、生理痛とか、見た目では解らないからね。よく寝てるわよ、ここで」

「ふうん」

「さあ、あなたは本当に気分悪いんだから、もう少し横になつてなさい」

言われたとおり横になる。何も考えるまもなく、寝付いた。

*

外がつるさい。目がさめる。目前の下校時間になつたのだと気がついた。様子を見に来た担任に、大丈夫です、一人で帰れます、と告げて保健室を出た。文芸部室にも書き置きをした。まっすぐ家に帰ろうと思つた。

校門からずつと嫌な予感がした。角ごとにあの男が立つていそうな気がして恐ろしかつた。

*

昔、よく父親が小学校の帰り道に待つっていた。

『氷でも食べようか』

黙つてついていく。

『おかあさんには言つなよ』

秘密。秘密。秘密。

口を開ざす。

貝になる。

仮面を被る。

*

父親が買つてくれた小さなお人形。

見つからぬよう引出しの奥に隠していたのに。

『会つたの?』

『どこで?』

『いつ?』

父親との約束。

母親の詰問。

口を閉ざす。

貝になる。

仮面を被る。

*

余所者は、私。

*

「 よお」と声をかけられる。驚かない。来るのはわかつていたから。

「何ですか?」と歩きながら。

「お嬢さん、お茶でもいかがかな」

「結構です」

「 そう言つなよ。俺は恋人の兄だよ」

「 そんな言い方はやめてください」

「違つのか」

立ち止まる。男を見据える。

梅雨明けのギラつく太陽の下に出してみれば、ただ瘦せて貧相な若者だ。汚いTシャツ、破れたGパン、裸足にサンダル。目つきだけが全体と不釣り合いで異様に鋭い。

こんなものを、と自嘲の笑みが浮かぶ。自分は恐れていたのか。

「お嬢さん、お茶でもいかがかな」

「 オ「りでしうね」

「 もちろん」

「 ジやあ、お好み焼きにしてください。お腹、すくべ空いでるんで

*

学校近くの商店街は避けて、少し遠いところまで行くことにした。早足で歩くと、男はもう息が上がり、ついてくるのもやっとだった。

「元気だな、お嬢さん」

「そんなことないです。さっきまで保健室で寝てたくらい」

「俺が、怖くないのか？」

立ち止まる。振り返って、見据える。

「ぜんぜん」と言い放つ。

これまでさんざん影におびえさせられたお返し。

「お嬢さん、強いな

無視して歩く。

*

復讐する。いちばん高い大玉を注文する。男はビール。

「彩花は、どうだ。いい子だろ？」

「悪い子ですよ。ものすごく」

「悪い子、か。それはその通りだ。なかなか言つね」

「で、何なんですか？ 昨日の詫びですか？」

「それもある。ノックくらいすべきだった。失礼した」と、男は頭を下げる。

「ほかには？」

「むしろ、お嬢さんの方が俺に聞きたいことがあるんじゃないかな？」

図星だった。

「図星だろ」

「それは食べてから言います」

「おお、そうだな。しつかり食べててくれ。このあとお茶に行つてもいいし。そうだな、お嬢さんが食べてる間、俺の血口紹介でもする

「どうぞ、『自由に』

「お嬢さんも、今度の事件があつたから、もつ知つてるんだろ？」

K大の社研がどういうところかも

私は黙つて玉を裏返した。

「ばかばかしい話さ。いつの間にか、アナキストだもんな。大企業の部長の息子が。でも、お嬢さんの親父さんも似たようなもんだつたんじゃないのかな」

「お父さん？」

「聞いてないのか？」

首を振るしかなかつた。

「言つちや悪いが」と男はビールをコップについて舐めた。「お嬢さんの家の、この間亡くなつたお祖父さん、ありや反動地主の典型だ。あんたのお父さんが反抗したのも無理もない。絶対的に正しい行動だ。おお、もう焼けたんじやないのか？」とりあえず、食えよ」男が思つたよりもなのに安心して食欲が戻つた。一人では無理かと思つた大玉も男に少し手伝つてもらつただけで食べ切れた。

*

「で、何から聞きたい？」

男は次に入つた喫茶店でまたビールを注文して言つた。私はコーヒーにした。

「ここの間、うちに何しに来たんですか」

「リヤク、さ」

「リヤク？」

「掠取のリヤクさ。あるところからは、取る。そういうことだ」

「ゆすり、ですか」

「ゆすられるような」とを、お嬢さんの家はしたのか？」

「知りません」

「知らないだろ？。いや、知らないていいんだ。今は、な」

「ゆすりでないなら、じゃあ、何しに来たんですか？」

「言つたろう、リヤクさ。人民から不当に搾り取り掠奪したものを、人民がこんどは掠取する。正当な行為さ」

「それと私の家と何の関係があるんですか」

「あなたの家はな、まず、戦前は不在地主として小作農民の血を搾り取つた。それで戦後はGHQのお目こぼした山林をゴルフ場なん

ぞに開発して自然を破壊して原初的蓄積を終え、今では開発会社を作り、そこで働く人民を搾取している。違うか？」

「言ひ方は色々あるでしようけど、それがそんなに悪いことだと思うんだつたら、家に来たりせずに、会社の方に直接行つたらいいじゃないですか？」

「会社、か。お嬢さんは不思議に思わなかつたのか？ 小さこ頃、父親が家にいなかつたのを」

「思いません」

「思つても、口に出しかばやだめだと想つてただけなんだらう。」

「同じ」とです

「同じ」と、か。それが同じことだとは、お嬢さん、強いな

「いいえ」

「ま、そういうわけで、お嬢さんの家からは徹底的にリヤクをせてもらひ。いいかい？」

「なぜうちらなんですか？」

「俺がそう決めたからさ」

「やっぱりゆすりなんですね」

「それは違うよ

「違ひません」

少し沈黙があつた。

「俺と一緒にいた女、知つてゐるだらう？」と男は言つた。

言ひ返せない。それがいちばん聞きたかったことなのだ。

「向こうはよく知つてるよ。よく見に行つたらしいからね。お人形みたいに綺麗なお嬢さん、あんたを」

「私を？」

「自分がいるはずだつた場所にいる女の子をね。お祖母さんは何か

勘違ひして、そのたびにお小遣いをくれたらしいけど

「どういつ意味？」

「あいつはね、お嬢さんのお姉さんさ。腹違ひのね」

「驚かない。やっぱり、としか思わない。そのかわり、重苦しいも

のがこみ上げてくる。やせりそつなのだ。と思つ。驚きの代わり、知ることの重さが胸に腫に満ちる。喉にまでこみ上げる。

「あじつは十八だ」

かるうじとうなづく。涙が出そつになる。

「それでもう、子供を産めない体だ」

驚いて男の顔を見る。

「どうこつ、ことですか？」

「四回も中絶して、性病にも、何度もかかつた」

「……どうして……」

「中学生から体を売つて暮らしてたからさ。最近は安全にお口専門にしているが、そんな知恵は中学生のガキにはなかつたうからな」

涙があふれてきた。どうして？

「なんで体を売り始めたか、おしえてやううか。お嬢さん、あんたみたいに綺麗なおべべを着たかったからさ。綺麗なおべべを着れば、自分もあんたみたいに綺麗になつて、みんなから大事にしてもらえるかと思つたんだとや、あんたみたいに、な」

胸に固まりで留まつていたものがこみ上げる。もう涙を止められない。

「いいかい、お嬢さんが同級生の女の子と乳繩り合つている間も、たつた今も、あの子は裸で男のモノを口にくわえてるんだ。一日に十何人とな」

「もう、もう、やめて！」

「男の精液を口で受け止めてるんだ。たつた今も。わかるか」

喉にこみ上げてくる。

耐えられず、立ち上がる。

トイレへと走る。

間一髪で間に合つ。悲しみと、苦しみと、怒り、そしてせつしこい気になつて食べたお好み焼きがこみ上げる。何度も吐く。あの子、あの子が姉だなんて。そしてそんな仕事をしているなんて。すべてが悔しい。

自分が悔しい。

何もかもが悔しい。

何も知らなかつた自分が悔しい。

……消えたい……

*

「大丈夫か？」

うがいをし、顔を洗い、身構えて席に戻ると、男は平然とタバコをふかしている。

「あなたのオゴリ、全部トイレに流してきた」

「そうか。ま、遅いか早いかの差だ」

「下か上かの差じやない？」

「ほう、これは参つた。どうだい、俺たち、仲良くなれそづじやないか」

「あら？ 仲良くなつてどうするの？」

「どうする？ 仲良くなるのに意味があるのかね。たとえば彩花とお嬢さんと、仲良くなることに何か意味があるのか？ あれこそ全くの無意味じやないか。ま、俺に言わせりや、お嬢さんの、その絶世の美貌こそ全くの無意味だね。隙がなさすぎる。それじやあ男は近寄れんだる。寄つてくるのは、きっと、彩花みたいな狂つた女だけだ」

「気分が悪いから帰ります」

私は立ち上がつた。

「俺たち、今日は有意義な出合いだつたと思わないか？」

「そうね。このこと彩花は知つてるの？」

「知るわけないさ。知らせる必要もない」

「じゃ、これからも黙つていてくれるわね」

「秘め事か？ いいねえ。俺としては、もっと淫靡な秘め事がいいんだがね」

「それは間に合つてます」

「彩花で足りてるつて？ まあいい、今日は帰りな。また会えるだ

るうしな。そのうちあの子も紹介するよ。それから彩花にも会うんだ。する前にさちやんと鍵をかけろって

財布を出す。

「俺が出すよ」と野。

「どうせ」と言いかけて、また涙が出そうになる。「私の家からり
ヤクした金なんでしょう！」

テーブルにコーヒー代を叩きつける。

*

喫茶を出ると、張りつめていた心の糸が切れ、涙が噴き出す。
歩きながら泣いた。

泣きながら歩いた。

ハンカチがグシャグシャになつた。

そしてふと気がつけば、きつい日差しの下、油蝉が鳴いていた。
入道雲。

……私の世界は変わってしまったのに、夏は夏らしく、たゞぬき
輝き、木の葉は真緑に照り映えている。
夏の風が私の髪とスカートの裾をなぶる。

拭つた涙も一瞬で乾く。

立ち止まり、深呼吸し、振り返り、この世を眺める。

これほど世界を美しく感じたことはなかつた。

この美しい世界で、自分が綺麗な体でいることが許せない。

どこか汚い世界に身を投げてしまいたい。

帰る場所がない。

けれど家にしか帰れない。

*

「何があつたの？」と雰囲気を察した母が聞く。

「なんでもない」と部屋に駆け上がる。

枕に顔を埋め、声を殺して号泣する。

*

口を閉ざせ！

貝になれ！

仮面を被れ！

*

余所者は、

私。

(続く)

八

泣き疲れ、自分を哀れむのにも飽きて部屋から下りていく。
母親がキッチンのテーブルに座つている。

「何か、あつたんでしょ」と、待ちかまえていたよう。

「別に」

「あの男に会つたのね」

「いきなり図星を突かれる。

というより、母親の知識からして、それしか思い当たるま。

「会つたわ」

「どうで」

「どうだつていいでしょ」

と、自分でも驚くほどのふてくされた口調。

「なんなの？ その言い方は？ いつたい何を聞いたの？」

もう潮時かな、と自分で思う。

知らぬふり、子供のふり、聞かぬふり。

そんなのは、もう、ここで終り。

「お姉さんのこと」と、思い切つて言つ。

思い切つたわりには、あまりすつきひとつしない。

「お姉さん？」

「腹違この」

言葉のじぎみから氣づく。

母の顔はのつぱりとした無表情に叩きつけられる。

「なんて言つたの？」

「腹違このお姉さんのことよー。」

「お姉さん？」

母の顔に表情が戻つてきた。

仮面の夜叉のような、憎悪そのものの顔へと徐々に変じた。

「お姉さんなんて、呼ぶなあ！ あんな、泥棒猫の子供があー！」

小さい頃は、このあと必ず平手だった。

いまはもう打たれることはないとわかつても、恐怖に金縛りになる。

何も言い返せない。

「おまええ、何も知らないくせに、何も知らないくせに。いいか、あの女の母親がどれほど私を苦しめたか。私がどれほど血を吐いたか。何も知らないくせにいーっ」

母は髪を搔きむしり、自ら額をテープブルに打ち付ける。

一瞬後に振り上げた髪は乱れ、夜叉の面が張り付いた顔は紅潮しながら震えている。

田には、こちらが気を抜くと飛びかかって来そうな、異様な光が満ちている。

あまりのことに恐怖を通り越して金縛りが逆に解け、すつきりと頭が澄み渡る。

そして思い出した。

昔もそうだった。

こうやって発作を起こし、私を恐れさせていた。

数分後にはケロリと直っているくせに。

恐怖が、嫌悪に変わる。

どうしてこんな大事な記憶をこれまで忘れていたのか。母がこんな女だったことを。

いつから発作がなくなつたのか。

……父の死……

それに気づくと私はまた金縛りになる。

*

どれほど金縛りの時間が過ぎたのか、よくわからない。

居間の電話が鳴った。

母は平然と歩み寄り、受話器をとった。

「はー、もしもし」と一瞬で普通の声に戻る「まあ、この間は大変

だつたでしょ？ そ、うよ、うちにも電話があつてねえ。だめじゃ
ない、ちゃんとおうちの人には言つとかなきや。……いいええ、う
ちはいつだつていいのよ。だつて、うちの子つて、きょうだいがい
ないでしょ、にぎやかで樂しかつたのよ、ほんと。あ、じゃあ、
すぐそこにいるから、替わるわね」

あまりの変わり身についていけない。

受話器を受け取れず、落としそうになる。

「今日、あれから大丈夫だつた？」と彩花の声。

「ぜんぜん大丈夫じゃない」

などと話しながら、思いつく。

彩花はあの男の妹なのだ。

けれどもう恐怖はない。

むしろあの男が私の救いのよつたな氣をえする。

できればもう一度会いたい、と思つ。

「どうしたの」と彩花。

「ねえ、今夜、泊めてくれない？」と母に聞こえないような声で。

「今夜？ いいよ」と彩花も雰囲気を察して。「私もこの間、いき

なり泊めてもらつたから。食べ物はインスタントよ。いい？」

「いいよ、もちろん！」と、まるで向こうの提案に応じたような口

調で、キッチンの母に聞こえるようなわざと大きな声で。

「これから行つてもいいの？」

「もちろんよ」

「今日は、お兄さんは？」

「帰つてこないか、帰つてきても深夜だと思つ。大丈夫、部屋には
鍵かけるから」

「うん」

「じゃ、待つてる」

*

「彩花さんの所に行くの？」と母は、もう普通に戻つている。
「泊まりに来ないかつて。こないだのお礼だつて」

「そう。それはいいけど、さつきの話」と普通の調子で言つ。「お

祖母ちゃんには絶対にしちゃダメよ」

「どうして」

「お祖父ちゃんのことで苦労し続けなのに、また気苦労の種を背負わすの？」

言い返せない。

「あなたが、あの男からまず聞かされたつてこと、これは悪かったわ。あなたを子供扱いしてた。謝る」

*

そしてまた思い出す。

昔も、発作の後はこんな風に理性的だった。
鬼の母と優しい母と、なぜ同じ一人なのか、二人でないのが不思議だった。

*

「確かにね、あの子は、あなたの、アナタの、あんたの、腹違いの姉よ。でもね、そんなこと、私は認めてないの。絶対に。いい？私はちゃんと親同士が決めたお父さんの婚約者で、もう、戦時中から、十のころから、満州から、この家に養女で来ていたのよ。それなのに、あの女、いつのまにか、イツーノマニカ、人の婚約者に手を出して、勝手に籍まで入れて、あげく子供まで作ったのよ。それがあの子なのよ。昔ならね、地主の坊ちゃんが小作の娘にお手つきなんて、珍しくもなんともなかつたのよ。できた子はどつかに売り飛ばして、それですんでたのよ。いまは何？ 親が認めなくとも勝手に結婚できるからって、手を出して、籍まで入れて、子供まで作つて、その子供がまた、ああやつて、アアヤツテ、厚かましくやつてきて、養育費だのなんだの……あんなのはね、勝手にのたれ死んだらしいのよ。あんな、あんな、あんな！ 泥棒……泥棒……泥棒 猫の……」

「お母さんとお父さんは？」とたまらず母を遮る。
「死んだからよ！ あの女が死んだからよ！ 何か変な病気になつ

て、それでも掘つ建て小屋に凍えながら寝かしてて、薬もなくて、
あの人、困り果ててお祖父さんのところに帰つて来たのよ。お金貸
してくれつて。それまで、極道地主が、親でも子でもない、なんて
言つて、散々反抗して、逆らつて、家を飛び出したくせに、そんな
ときだけやつてきて、お金よ。お金、お金、お金。お金貸して下さ
いつて。その敷居の所に泣きながら額をすりつけて。の人もや
つと、やつと、わかつたのよ。お金のありがたみが。それで、お祖
父ちゃんに約束させられたのよ。ザマーミロ。お金は貸す。でも、
もし、あの女が死んだら、そのときは帰つてきて私と結婚するつて。
それでねえ」と、母は中断してしゃつべつのように、じぎれじぎれ
に笑い始める。笑いながら、

「小作の娘を！たかが小作の娘を！大学病院にまで入院させた
のよ。たかが小作の娘を個室に付き添いまでつけて！それで、や
っぱりダメだつたのよ！罰が当たつたのよ。そのまま掘つ建て小
屋に寝かせてりやすぐ死ねたものを、あの泥棒猫、死ぬまでの半年、
実験台にされて、血を抜かれるわ、切られるわ、いろんなことを試
されて、そういう苦しんだらしいわよお、それはそれは、語りぐさ
になるくらい……」

母を遮り、「わかつた」とだけ言ひ。
これ以上、聞けない……。

「わかつたでしょ。だから、あんなのは姉なんて思わなくていいの
ケロリといつ。
もう返事しない。
部屋へと駆け上がる。
涙も出ない。
身支度をする。

*

あの男の家。
けれどうちの家にいるみりは、まし。
あの男の妹。

けれど母親よりは、まし。

インスタントのカレーライス。

けれどうちの手作りを食べるよりは、まし。

*

一緒にお風呂に入る、と彩花は言つ。

一月前ならそうしたかもしだれない。

けれど今は嫌。奇妙に意識するようになったてしまった。

*

「何があつたの?」と彩花。

「言えない」と私。

「兄貴のこと?」

ハツとして彩花を見る。

どこまで知っているのだろ?。

「見られたくらい、心配しなくていいよ。お互い様よ

「お互い様?」

「ずっと前に見たことがあるの。兄貴がアレしていると」「アレって、アレ?」

「そう。ものすごくばつが悪そうにしてた。男なんだから、アレつて、して当たり前なんでしょう。もつと堂々としてりやいいのに。次の日から、なんか、私の前で居心地悪ううで」

あの男にもそんなことがあつたのか、と、ふと笑つてしまつ。

「おかしい?」

「うん」

「だから、気にする必要はないわ

「うん、もうしない」

「で、本当は何があつたの?」

順序立てては、もちろん話せない。彩花の兄、あの男との出会いの部分を抜いて、話す。物語めてきて、自分が悲劇の主人公のように思えてくる。

「男は、ダメよね」と彩花がポツリといつ。

「ダメって？」

「つかのお父さんも、ずっと、新しい女の所に行ってしまつてゐる。兄貴によれば、子供までいるらしいって」

返事できない。

つかの父親や祖父と同じだから。

*

「それで男が嫌いになつたの？」と私。
「前にも言つたでしょ。別に男が嫌いなんじゃない。あなたのことが好きなだけ」

「はつきり言つていー？」

私は生まれてからいちばん残虐な気持ちになつていた。彩花くら

い、簡単に、虐殺できそうな気がした。

「何？」と彩花は言つた。

「私は男が好き」

「そう」

「彩花とキスしても、もつともつとつて思わないの」

「祐ちゃんとの時は」

「思う。もつと欲しつて」

「そう」と彩花はまた、いつかと同じ、諦念したように言つた。

「『めんなさい』

「謝る必要はないわ。それに、私、前に言つたでしょ。あなたのはただの性欲だつて。あなたの体は性欲に支配されてる。でも、心は別のはずよ。心は私を求めてる。祐ちゃんなんかじゃなく」

「言い返す訳じゃないけど、それは変だと思う」と私は言い返す。

「最近、ずっとそのこと考えてたんだけど、彩花は私たちのこと、分割できない貴族、全人格的存在だつて言つたよね。だったら、私たちのことを心と体とに分けて考えるのがそもそもおかしいんじやないの？ 体が求めてるってことは、私たちの場合、心も求めてるのよ。そうじやないの」

彩花は考え込む。

ずつと考え込む。

「ごめんなさい」と沈黙に耐えかね、こちらから口を開いてしまつ。

「私とキスするのを、やめるの?」と彩花。

涙に濡れた長い睫毛が、私をいつそう残虐な気持ちにする。

「できたら、ね」

「嫌なの?」

「嫌じゃない。でも、できたら許して欲しい」

「できない。やめるなんて」と彩花は言つ。消え入るような声で。涙が左目からすうつとこぼれる。

右目の涙もすうつと続く。

その涙を見て、とびっきり残虐な言葉を思いつく。

「あなたは『弓』さんなのよ。いくらがんばっても。それでもいいの?」

これまで見たことのない素直な表情で彩花はうなづく。

とどめを射る。

「どれだけがんばっても、祐一の次なのよ。いいの?」

「いいの、それでも」

強烈な、強烈な勝利の陶酔。脳の芯がしびれるほど。

「私は……」と私は言つ。

言いかけて、陶酔と、自分自身への残虐な気持ちが抑えがたく湧いてくる。

「私は……汚れたいの、わかる?」

彩花は素直にうなづく。その素直さが気に食わない。

「それなら彩花、私を汚せる? 私が明日、別人になるくらい、彩花、あなた、私を汚せる?」

彩花はいつもの生意気な笑みを浮かべた。

「もちろんよ。最近、そればかり考えてたの」

「そればかり?」

「あなたを最初に汚すのは私だつて」

彩花の口調に、何か違う、と思う。

「雪の朝つてあるでしょ」と私は囁つ。

「うん」

「彩花、あなたつて、雪の朝、朝一番に、地面に足跡を付けて歩く
ような、そんなことを思つてない？」

「思つてるよ。あなたの体に、最初に私の足跡を残したいの」
「それはあなたの自己満足よ。それじゃだめなのよ。少々足跡がつ
いたつて、雪の朝の美しさは消えないもの。雪の朝の美しさがね、
一瞬で泥水の汚さに変わるような、そういう汚し方ができるかつて、
私は聞いてるの」

彩花はまた考え込む。

「答えてよ、早く！」

彩花は、今度は泣きながら、頭を抱える。
気の毒なくらい。

でも、もう声をかけてはやらなー。

一生懸命、考えるがいい。

「どうなのよー！」

そして彩花は立ち上がり、本棚の奥を探し、ノートを出してくる。
ページをめくる。開いて私に渡す。

渡されたノートに目をやる。私の名前が出てくる。

……あまりのグロテスクに氣味が悪くなる。

「ここに書いてある通りよ。本当は、私、あなたとのこと、こんな
ふうに、ずっと妄想してたの。どう？ これであなたが私を見限る
なら、それはそれでしょうがないわ。でもこれが私の正直な気持ち。
もうこれで後はないわ。これが私のすべてよ。今晚、私の好きにさ
せて。そうすればあなたは、泥水のよつに、汚れる」
彩花はつよいに声を上げて泣き始める。

「私はこういう女なの、こういう女なのよ

彩花はやはり、狂つている。

あの沈黙は、考えていたのではなく、これを見せるかどうかの逡
巡だったのだ。

ノートを返す。

「どう? 私のこと、嫌いになつたでしょ?」

「ちつとも」

と明るく言ひ。

「私を汚すのにふさわしいわ。彩花のしたいよつて、好きにして
手に手が重ねられる。

汚れるにはちょうどいい。

狂った女。

あの男の妹。

(続く)

九

乾きたての髪が、サラサラと肌に気持ちいい。

*

ふと、思い出す。

母と、祖父と祖母と。

四人で河原の道を歩いていた。

ポスターのような青空の下、緑の草の上、線路が通っていた。

土手の上から父が叫んでいた。

母が手を振つて答えた。

父の手には、お菓子が握られていた。

私は叫んだ。

「おとうさん、おとうさん」

父は大きく手を振り、私の名を呼んだ。

幸せだった。何も欠けていなかつた。

あれはいつ頃だったのだろう。

そしてこんな大事な幸せの記憶を、どうして今の今まで忘れていたのだろう。

私たちはあのとき家族だつた。

何も欠けるところのない、家族だつた。

そしてなぜ、今いま、思い出すのだろう。

父。

いつから父がいなくなつたのか、正確にはわからない。

わからないけれど、父が私だけの父ではないことにはなんとなく

気づいていた。

気づいていたから、聞かなかつた。

家が家でないような感じがしていた。

だつて、家には私だけの父がない。

*

何かを探り当てようとする指や舌は徒労に終わるような気がした。
彩花には結局、私を汚すことはできないのかもしれない。

*

正月。

お餅つき。

昔の小作の人たちが集まつてくる。

屈強な、私たちとは種類の違うような男たち。

餅をつぐ。あつという間につき上がる。

皺だらけの、これもまた私たちとは種類の違うような女たちが受け取る。

次の回。

父が参加する、という。

足手まといなのは明らか。

それでも参加する、という。

「坊ちゃんには、無理でしょ」「う」と誰かが言つ。

屈強な一群に穏やかな笑いの輪が広がる。

父は一緒に笑つたのか、それとも怒つたのか、わからない。

「やらせてあげてくださいな」と祖母。

屈強な男は杵を父に渡す。

その重さで、父はもうよろける。

「チツ」

舌打ちする母。

顔色を見る。

後で荒れるぞ、と思つ。

父が家にいた最後の記憶。

*

もういい、やめて、と体をかわす。結局何も起こらなかつた。悲しそうな彩花の目。

*

また思い出す。

祖母が泣いていた。

私は見つめていた。

「なんでもないのよ

「なんでもなくはない」と思つた。

父が消えたのに。

*

同じことを、こんどは私が彩花に返す。

彩花の体がビクン、と震える。

面白い、と思う。

*

「お父さんは？」

「知らない」と、母。

以上、終わり。

もう聞かない。

聞いてはならない。

いつか、いなくなる人だった。

わかつていた。

だから、もう聞かない。

*

彩花の体。

声を漏らさないよう口に巻いたタオルを噛みしめ、全身を泥と化していく。

こんなふうに汚して欲しかったのだ、私は。

こんなふうに、情け容赦なく、徹底的に、無惨に。

これは懲罰。

無能な彩花に。

*

小学校の入学式。

次の日。

通学路に父が立っていた。

泣きながら駆け寄った。

父も泣いているようだった。

帰ってきて。

とは言えない。

しゃがみ込んだ父と抱き合ひ、泣く。
名前入りの鉛筆を一ダース、もひつ。

「おべんきょう、しろよ

「おべんきょう、みるよ

*

私は今、何をしているのだろう。

女相手に。

こんなことを。

『おべんきょう、しろよ』

父の声。

『おべんきょう、しろよ』

父の声。

彩花の激しい硬直が私の指で崩れ落ちる。

どうして父を思いだしたんだろう。

こんなとき。

*

「男と女だったら」と私は言った。「あとで手とか、洗うの？」

「シャワー、浴びるんじゃない？」

「そうか

「浴びる？」

「そうね。けつこう汗かいだからね」

シャワーを一人づつ浴び、並んで寝た。
もう抱き合わなかつた。

キスもしなかつた。

話も、もちろん。

ただ純粹に気まずかつた。

タベの睡眠不足もあって、すぐに寝入った。
(続く)

一〇

朝食は彩花が一人分、部屋に運んできた。
ジュースとパンとインスタントのスープ。

「兄貴が帰つてくるの」

「そう」

「あなたが来てるのかつて」

「そうつて言つた?」

「うん」

「で?」

「会いたいって」

「私も会いたいな」

「下で一緒に食べようか?」

「うん」

彩花もきつと、一人だけでとる朝食が気まずかつたのだ。
ドアを開け、兄貴、と叫ぶ声がこじわなしか弾んでいた。

*

「昨日はどうも」ひそつと、彩花との男の機先を制する。
「いいえ、どういたしまして。あまりお口には合わなかつたみたい

だけど」

「どうしたの?」と彩花。

「昨日、実はお好み焼きをひそつになつたの」

「お嬢さんがあんまりお美しいんで、待ち伏せしたのさ」

「私、何にも聞いてない」

「お嬢さんが、彩花には秘密にしていてくれつて言つからせ」

「ごめんね、ちょっと恥ずかしかつたから」

「いいのよ」と例の諦念の返事だつた。

「清一さん」と私は男の名を呼んだ。

「ほつ、俺の名前を知ってるのか？」さすがお嬢さん

「名人、ですかね」

「名人？ どうして」

「清一さんつて、読書家なんですね」と男の質問をはぐらかす。
「なんだつて？」

「読書家」

「そりやまた、なんで」

「彩花の部屋の本、みんな清一さんのものなんじょ」

男は彩花と顔を見合させる。一人で噴き出す。

「嘘よ。本当は、全部私の本なの」

「え？」

「読書家なんて、あなたに言われたから、なんとなく兄貴の本だつて言つちやつたの。ごめんなさいね」

「また私に嘘をつけた」

「こいつから嘘と妄想を取つたら女好きしか残らないだろ、勘弁してやつてくれ」

「じゃあ、あの本、みんな彩花が読んだの？」

「全部が全部、最初から最後までは読みはしない。面白かつたら読むけど」

「気まぐれなんだよ、こいつは。体系だてて物事を考えようとしたい」

「体系？ 何がいいたいの、兄貴」

「知識には体系つてものがあるんだよ」

「誰が知識のために本を読むの？ 私はそんなことしないわよ」

「だからダメなんだよ、おまえは」

「兄貴こそ、本を知識のためにしか読まないから、人間つてものがいつまでたつても理解できないのよ」

「人間ね、人間。お前の議論には、いつまでたつても階級的視点が欠けてるよ。ブルジョア小説やブルジョア哲学ばかり読んでるからそうなる」

「自分だって、ブルジョアの息子のくせに」

「出身階級と思想とは基本的には関係ないさ。要は、やつてることだ。そりゃ、お嬢さん?」

「何がなにやらわからない。なぜ私に話が持つてこられるのか。

「地主階級の御曹司かつアナキストの忘れ形見のお嬢さん、何か言つてくれよ」

「言つてる意味がわかりません」

「わからなくていいのよ。兄貴の言つてることなんか、みんな屁理屈なんだから」

「屁理屈ね。彩花は現実を何にも知らないからな。現実を知らないと、理論つてものが屁理屈に聞こえる。そう思わないか、お嬢さん」「現実つて、何なんですか?」

「たとえば、お嬢さんにとってのお嬢さんさ」

「やめてください」と私。少し感情的になる。

「お嬢さん、いるの?」と彩花。

「(+)にいるゆすりに聞いて」

「ゆすり?」

「ま、彩花も現実を知るいい機会だ。(+)のお嬢さんにはな、腹違いのお嬢さんがいるのさ。うちの社研OBの大先輩の娘さんなんだが」「社研OB?」と聞いてしまう。

「知らないのか? あんたの親父さんは、俺たちの大先輩さ。俺たちの組織がコミニストにいちばん迫害を受けてるときに、身を挺して党を守った英雄なんだ。もつとも俺は、英雄なんて個人崇拜はしないがね」

「何を言つてるんですか?」

「お嬢さんの家じや話題にもならんだろうが、ま、偉大なアナキストだつたつてことさ」

「知りません、そんなこと」

「知りなくてあたりまえだがね」

「もうやめようよ」と彩花。「もつと楽しい話をしようよ

「もう、兄貴ったら、やめよ！」が、彩花の逃げ場になつてゐるのを

「どうだ、お嬢さん、これから外で

「コーヒーをオゴらせてくれないか？」

「いわよ」

「あら、うわなだ。彩花、後かたづけを頼む。

「屋に行く」

「行くの？」と彩花。

「うん。また電話するね」と席を立つ。

彩花も引き留めない。

溝を掘つた。昨夜の彩花の壊滅的な失敗と、私の徹底的な懲罰が、二人の間に

それでも玄関を出るときまで おたね と言いたい

*

毛力

「アマゾン」

三人同時

「タバコが樂しみだつたよつだな」

「アーティスト？」

「あんな深夜に、どうしてのジャムを

「デすな想像」

「懲がつたな。 ザすで。 まあーー。 あの家は鳥が詰まる。 朝食のあ

アーティストとしての才能を發揮するのが俺の唯一の應該だ。

「なんでもない。お嬢さんのおいな絶世の美女となら」

「やのこか、せめてくれませんか？」

自分で思つたことはないか？ 美人だつて

「ありません」「

「嘘をつくんじゃない。小さい頃から意識してたはずだ。まあいい。

そんなことは」

「コーヒーが来る。香りが立ち上る。

「香りが贅沢だな、モカとキコマンが並ぶと」

「うん」

「どうだい、せっぱり俺たち、仲良くなれそうじゃないか」

「聞きたいんですけど」

「何を?」

「父のことです」

「聞いてどうする?」

「あら? 聞かせたいんじゃないなかつたの」

「お嬢さん、なかなか言つね。好きだよ、そつこいつとい。想像以上

だ

もう言ひ返さない。

「コーヒーを味わう。

「ブラックなのか?」

「まずはブラックでしよう」

「昨日もそうだったか?」

「昨日は、こんなに立派なコーヒーじゃなかつた。香りからして」

「そうだな。たしかに」

「一人とも黙り込む。

そのまま時が過ぎる。

どうしたのだろう。

ゆつたりしている。

祐一や彩花といふとおのれのよひにペコペコしない。

*

「『死と乙女』だ」

「なんですか?」

「この曲。シユーベルトの弦楽四重奏」

「なんだか、『運命』みたい」
「リズムの展開はよく似てる。たしかにね」
「どうして『死と乙女』なんて題名なの？」
「第一楽章の冒頭に、『死と乙女』って歌曲からメロディを探つて
るからね」

「運命、死と乙女……」

「どうした？」

「難しい曲ね」

「うん」

*

「清一さんつて」

「なんだ？」

「本当は優しい人なんじやないですか？」

「そうさ。優しいよ」

「自分で言うなんて」

笑つてしまつ。

「この種の優しさはただの弱さだつて、同志からは言われるがね」
「優しさが責められるんですか？」
「階級闘争を戦つてゐるんだから、仕方ないだろつ」
「よく知らないんですけど、セクトつて何なんですか？」
「セクト？ なんでそんなこと知りたい」
「あの事件なんかで話題になつたから」
「あんたも、あの子の死体、見たんだつたな」
「そうです」

「あれは無関係だよ。夜の夜中に女一人で歩いてるから、あんな目にあつ」

「そんな言い方は……」

「可愛い子だつた」と男は私をさえぎつて言つた。「素直で、優しくて。女の子一人で帰すからあんなことになる。あれは俺たちの責任だ」

何も言えない。

沈黙。

*

「ほら、ここからが『死と乙女』のメロディー」
「綺麗。でもどことなく不気味」

「死神と少女の対話なんだ」

「どんな?」

あっちへ行つて、お願ひ

荒ぶる死神！

私はまだ若いの 消えてよ、お願ひ
どうか触らないで

手を取ろつ 若く美しいお前
これは罰じゃない 思いやり
落ち着きなさい 痛くはしない
そしてお眠り 私のやさしい腕で

「俺流の訳だがね」と男は言った。
水底の女の子を思いだした。あの子も死神に、あっちへ行つてと
お願いしたに違いない。それでも死神の腕に抱かれてしまった……。

「不気味な歌ですね」

「だから美しいのさ」

「不気味だから、美しい?」

「美しさには不気味が潜んでいるものなんだ。お嬢さんといつしょ
れ。お嬢さんにはあの家があるだらう?..」
言い返さない。音楽に聞き入る。

*

「辞めないんですか?」

「何を?」

「セクト」

「そりやまた、どうして」

「似合わない」

男は噴き出した。高笑いした。

「お嬢さん、賢いんだか、バカなんだか」

「バカなんです」

「だろうな」

頭にはこない。確かにバカなんだろうな、と思つ。

また沈黙。

「コーヒーに茶色の角砂糖を入れる。

「砂糖、入れるのか」

「味が劇的に変わるのよ。やってみて」

「俺はいいよ」

「やつてみて」と、半分残つた男のコーヒーに角砂糖を放り込む。

「ちえつ、なんてことを」

「飲んでみて」

男は砂糖を溶かしてカップに口を付ける。

「どう?」

「驚いた」

「でしょ。おいしいコーヒーはね、半分ブラック、半分砂糖を入れるものなの」

「同じことを言う女がいるよ。そいつは「コーヒーの味なんかわかりやしないくせに、安物のインスタントでも同じ」とするんだ」
もう誰のことかわかる。だから聞かない。

「それが誰だか聞かないのか?」

「わかつてゐから」

「そうか。お嬢さんがバカだつてのは撤回する

また沈黙。

ふたり、甘いコーヒーを啜る。

恋人か誰か、いちばん安心できる男とふたりでいるのじゃないか

と勘違いする。

田の前にいるのは、いつからリヤクしようとしてる男。

あの狂った女の兄。

なのに。

*

「俺は行くよ」

「どこへ？」

「これでも活動家だからね。結構忙しいんだ。これから一度家に帰り、それから学校で会議。それからこんどの「モノの打ち合わせ……」

「そう」

「あなたはここにいたけりや、まだいてもいい。『一ヒー代はここに置いておくから』

「じゃあ、そうする。行つてらっしゃい」

「ああ……『行つてらっしゃい』。『行つてらっしゃい』なんて、

何年ぶりに聞くんだわ。じゃ、行つて来ます」

男の笑みには皮肉のひとかけらも混じってなかつた。

初めてだ。この男のこんな笑み。

本気で無事を祈りながら見送る。

ドアを押し開けて出していく男。

「ふう」と息をする。

やつとひとりになれた。

『死と乙女』が終わるまでここにこよつ。

*

祖母に教わった飲み方だつた。

祖父は戦前から「一ヒー」が大好きだつた、という。戦時中の物のない時代には、祖母がタンポポの根や大豆を煎り、代用品を作つて飲ませてあげていた、という。

「お砂糖は？」

「もちろん無いのよ」

砂糖も代用だつた、という。タマネギを乾煎りして、煮詰め煮詰

めした茶色のビーカーしたもの。ほんのり甘い。といつ。

「戦後に初めてコーヒー豆が入ってきて、それを炭火で煎つたら、それはもう、いい香りが家中に立ちこめて、ああ、本当に戦争が終わったんだなあ、って思ったものよ」

きつときのコーヒーは、父と、そして養女で来ていた母も飲んだのだろう。

*

想い出の中の父もコーヒーを飲んでいた。

あれはどの店だったのだろう。

算数の宿題を見てもらっていた。

私が父のカップに触り、コーヒーがプリントの上にこぼれた。しかられる、と思つた。母ならきっと叱つた。

「あーあ」と父はあきらめの口調で言つた。「ま、しょうがないさ。お醤油をこぼしましたって、先生には言つたらいいよ。いや、醤油にしては色が薄いかなあ」

*

どうして昨日から父のことがばかり想い出するのだろう。

*

『死と乙女』が終わつた。

マスターがレコードを替えていく。

さて、私も出よう。

で、どこへ？

家に、帰る他はない。

魔の潜む家に。

(続く)

—

一週間、何もなかつた。誰からの電話も。もう肉体関係はこりごり、だと思った。ずっと、殊勝に机についていた。

自分には勉強以外ないと思つてゐる。運動もできない。

特技もない。

父もない。

勉強しか、ない。

*
あの女の子はどうなのだらつ。何か、これが自分だと言えるものがあるのだろうか。

きっと、ない、と思つ。

あの薄ら笑い。

自分への自信も何もなく、ただのお追従の固まりと化したようなあの笑み。

姉。

私と父を共有する人間。

*
窓を開ける。

瓦に焦がされた空気がムツと入つてくる。

*
冷房がないから、朝の冷たい空気が逃げないよう、熱い空気が入つてこないように、昼間は窓を閉め切つてカーテンも開けず、洞窟のような部屋で過ごしている。

*
まぶしい。

夏の日差し。

田の前にある銀木犀の大木。

*

小学校に上がる前、この木が自慢だった。季節になると雪のよつに白い花を散らす。その白い小さな固まりがほのかに香る。マッチ箱に集める。友達に差し出す。ああい香り、と友達が言ひ。

小学校の校庭には金木犀があった。もっと強く香り。比べれば、負ける。祖母に直訴する。

「どうしてうちは金じやないの？」

「金木犀はね、香りじやないの、あれは匂いなの。銀木犀より下品なの」

「下品？」

「誰だつて、あれが匂つていい、わかるでしょ？」

「うん」

「そうこのを下品つていうの。あれ、この香り、ビックりするんだつて、そういう、かすかな香りがいちばんなの」

「かすかな？」

「そうよ、かすかな」

かすか、という言葉を憶えた。

*

銀木犀は自己主張しない。そこにあることさえ忘れさせる。花の季節にも、樹の下に入つてじつとしていなければその樹が木犀であることを気づかせない。樹に身をあずけ、じつとしている者にだけ、かすかな香りのヴォールをかけてくれる。

*

高等部への入学式前に祖父が逝つた。
棺だけが家に運び込まれた。

父親の時と同じ。

喪主は祖母。

りん、として、美しかつた。

銀木犀のようだ。

*

いつもごろだらう。

父が消えてすぐ、祖父が消えた。

女だけの家になった。

祖父はたまに帰つてきた。

いつもおみやげ。

お小遣いも。

*

可愛がつてくれた。

いつも違う綺麗な服を着せてくれた。

祖父の前でクルリと回つて見せたりした。

*

「お祖父ちゃんは」と、そのころ祖母は言つた。「女を人とは思つてないの」

女？ 人？

「お祖父ちゃんはね、昔の人だから」

昔の人？

「女はお人形さんだと思つてるのよ

よくわからない。

「だから、あまりおねだりしちゃ、ダメよ」

どうして？ うちはお金持ちだから、お洋服でも、お人形でも、なんでも買つてくれるって、お祖父ちゃん、言つてたよ？

「このままだと、お祖父ちゃんは、きっとあなたを駄目にする」

駄目つて、何？

「いいの。今はわからなくて」

「わからない。」

*

いつからか、おみやげがなくなる。

お小遣いも決められた金額だけになる。

祖父そのものが家に帰らなくなる。

*

「かわいそうなことをした」と、祖母は言ひつ。

私の父親のこと?

「おかあさんのことよ」

おかあさんが? なぜ?

「お祖父さんが満州にいたころの親友の娘なの。馬賊のまね」としてた仲間で、義兄弟のちぎりなんかして、あげく、子供同士を結婚させて、親戚になろうなんて約束して」

親戚? 約束?

「それでね、おかあさん以外のおかあさんの家族はね、みんな終戦の時、満州で死んじゃつたの」

みんな? 死んだ?

「おかあさん、ここ以外に行き場所なんかないの」「自分の家以外に行き場所のある人がいるんだろうか? お祖母ちゃんの昔話はよくわからなかつた。もちろん、今はわかる。」

*

祖父が死んでから、知らない親戚が出入りするよつになつた。祖母はよく「向こう」「向こう」と言つた。

「今日は、向こうの人が来るからね……」

「今日は向こうの弁護士が……」

「ちょっと向こうと話があつて……」

向こう・向こう・向こう。もつ何年も祖父の家になつていた、別の女性の家。父の腹違いの弟がいて、会社を継いでいる。その家のこと、「向こう」。「ううう」。

*

「お祖父ちゃんはね」と母は言つた。「お父さんと同じで、この家が嫌いなのよ」

家がきらこ?

「お祖母ちゃんのことは好きなんだけど、家がダメなんだ」「どうこいつ」と、

「受け継いでいくつこの重さよね」

重さ?

「女には、わからない」とかも知れないわね。お祖母ちゃんもわからないみたいだから」

女には、わからない?

どうしておかあさんにはわかるの?

「ひとりだからよ」

ひとり?

*

祖父名義の不動産や預金は妻である祖母の方へ。会社は「向こう」の息子の方へ。

そんな話になつたのはおぼろげながら知つていた。落着したのかと思っていた祖父の死を、さらに掘り返したのがあの女の子とあの男だつた。

十八、にしては幼い感じを『える。私と同じか年下のよつな……。もう恐怖は消えていた。

むしろ、お金くらい、出してあげればいいのに、と思つ。けれどそのお金はあの子に行くのだろうか。

あの男のセクトとやらに行くのは嫌だ、と思つ。

*

母親も祖母も、学生運動を怖がつていて。私も、怖い、と思つ。何がしたいのか、あの人たちは。ただ壊したいのか、誰かを殺したいのか? それとも誰かに操られているのか。あの男の、ちょっと醒めた感じ。活動家つて、みんなあんな感じなのだろうか。

*

肉体のことは考えないようこじしている。

女とは一度としない。

祐一とは、してもいいかな、と、ふと思つことがある。

祐一の腕の中で思いつくり泣けたら、自分を哀れんで泣けたら、と思う。

そのあいだ、祐一が何も聞かず、ただ髪を、手で、指で、梳いていてくれたら。

そうしたら、私はすべてを祐一の前に投げ出すかも知れない。

彩花のときのよう。

彩花。

どうしているんだろう。

何も連絡はない。

(続く)

一一

一年の先輩から電話。

「彩花が自殺したの、知ってる?」

頭が真っ白になる。

まさか!

なぜ!

どうして!

声も出ない。

「未遂なんだけど

みすい?

それなら生きてるんだ。

脳に血が戻つてくる。

「知らなかつたの?」

「はい」

「登校日の、次の日らしいんだけど」

「脳の血が、激しく巡るのがわかる。」

登校日の次の日。

私が彩花と最後に会つた日。

あの男と『水車小屋』に行つた日。

彩花を徹底的に汚した、あの夜の朝!

私のせい?

私が彩花を殺した?

いや、殺しかけた?

「もしもし、聞こえてる?」と先輩の声が私をこの世に引き戻す。

「いえ、はい、聞いてます」

「睡眠薬を飲んで、胃を洗つただけなんだつて。でも、今も入院してるらしいの。みんな、狂言だつて言つてるけど」

「狂言？」

「あなた、どう思つ？」

「わかりません！ そんなこと」

思わず叫んでしまう。

「ごめんなさい。いきなりこんなこと聞いて」

あまりの不躾さに怒りが湧く。

なんだ、こいつは、と思つ。

「じゃ、また何かわかつたら連絡するわね」

私の勢いに気おされたのか、おとなしい声になる。

先輩なのに、なんという無邪氣。

でも仕方ないか、と思つ。

私たちの関係、あの男以外、誰も知らないのだから。

*

彩花の家に電話する。

「はあーい」といきなり間の抜けた声。

「彩花さんは、いらっしゃいますか？」

「はあー」

「彩花さんは、ご在宅ですか？」

「あー、彩花？」

「はい、彩花さんは？」

「彩花？ 彩花は私の娘ですけど」

「お願いできますか？」

「ああー」

「彩花さん、お願いできますか？」

「彩花はね、私の娘なんですよ」

まだ朝なのに、酔つてゐる。

どうしようつもない。

切る。

*

祐二に電話する。

「初めて聞いた」という。驚いている。

「まだ確認してないから、誰にもいわないで」とすぐに切る。

時間を見る。

もしかしたら、と思つ。

*

いた。

前と同じ席で悠然と本を読んでいる。

「よお」と親しげに叫ぶ。これが、妹が自殺未遂した兄の態度か、と思つ。

向かいの席に座り、キリマンを注文する。

「聞きたいんだけど?」

「なんでも。彩花は今……」

「入院してるんですよ?」

「はあ? なんでお嬢さんがそれを知ってる?」

「さつき、先輩から電話があつた」

「ちつ」と心底悔しそうに舌打ちする。こうこう表情も初めて見る。

「しょうがないな、だから特別病棟にしつけて言つたんだ」

「自殺未遂つて、本当ですか?」

「そこまで知つてるのか!」

「先輩が」

「きつとあいつが自分で喋つたんだ。まったくどうしようもないな

「じゃあ、事実なんですね」

「睡眠薬を飲んだのは事実だけど、限りなく狂言に近いよ。ありや發作的なものさ。だつて、俺の目の前だつたんだから。飲んだの」

絶句する。

「どうして?」

「俺はもう、あれにはかかわりたくないんだけどな

「どうして? 自分の妹のことでしょう?..」

「そうか。あんたにとつては愛しい愛しい恋人だもんな

「そんな言い方……」

「病室に直接行けよ。そこで彩花から直接聞いたらい。俺からは言えん」

「私には何にも……」と私は恐る恐る言つた。『知らせてくれなかつた』

「普通の病気や事故じゃないんだし、仕方ないだろ。あいつ自身も、誰にも言うなつて言つてたんだから。わかるだろ、刺激できなことくらい。さあ、もういいだろ。コーヒー飲んで、早く見舞いに行けよ。今なら会えるよ』

男は心底不機嫌な様子で本に戻つた。

こんな扱いを受けるとは思わなかつた。これほどストレートな拒絕とは。

そして拒绝にあつて初めて、自分が彩花の消息とは別の何かを、この男に期待していたことに気づいた。あの朝の、ゆつたりとした時間のよくな、何かを。

*

拒绝の沈黙の味は時間がたつにつれ強烈だつた。

コーヒーの味などわからなかつた。

何か話しかけて欲しかつた。

急に泣けてきた。

「悪かつた」と男は言つた。『あの件に關しては、俺は余裕がないんだ。俺の家のことだからな。彩花一人で親戚の家に行つているつてことにしてたんだ。きっと、病院で誰かが彩花に会つて、それで彩花自身がそいつに喋つたんだろう。お嬢さんにも心配かけてすまなかつた。彩花は、肉体的には、何も問題ない』

「じゃあ、精神的な……』

「まあ、そうだな。知つての通りの人間だから』

「さつき、おうちに電話したんです』

「母親が出たか』

「はい』

「話にも何にもならなかつたろう』

「話にも何にもならなかつたろう』

「はい」

「病気なんだ。いつも、もう入院させないと」

「病気?」

「アル中だよ。見ての通り」

「入院させて……」

「治むかどうかはわからない。ただ、このままだと彩花が駄目になる。あいつ、母親を治せるのは自分だけだって思いこんでるから」

「治せる?」

「ああ。自分が良い子にしてれば、母親は酒をやめて昔のようになつてくれるつてね」

「……」

「だから、俺は、あいつも狂つてゐつていうんだ。別にあいつも悪い子だったから父親が家に帰らなくなつたわけじゃないし、もちろん、あいつが悪い子だったから父親が外に女を作つたわけじゃない。そんなことはあいつも、理性ではわかってるさ。でも、駄目なんだろうな。どうしても、自分が何とかしなきやつて思うんだろう。あいつが泣きながら、母親に、お酒やめてつて頼むのを見るのは、もう、それはそれは痛ましいよ……」

「泣いて頼んでも駄目なんですか?」

「駄目だよ。あれはもう病気なんだから。意志とは関係なく、体が酒を求めてるんだ」

「お酒を取りあげたら?..」

「どうやって?」

「隠すとか」

「大人なんだよ、あっちも。隠しても、買いに行くさ。お金を持つて」

「じゃあ、もう、ビリジヨウサム……」

「ないね」

絶句する。

「「」の間の胃洗浄と点滴も」と男はタバコを取り出し、失礼、と言

つて火を付けた。「彩花と母親の、『お酒やめて』『うるさい』の延長線上さ。俺の見てる前で、彩花が死ぬって言い出したんだ。お酒やめてくれなれば、死ぬってさ。それで母親も酔つてるもんだから、自分の睡眠薬の瓶を投げつけて、死んで見せろ、ここでさあ死んで見せろって。ひどい話さ。自分の産んだ娘に向かつて。で、彩花も彩花で、瓶の蓋、あけて、薬をさらーっと手のひらに出して、バラバラ床にこぼしながら、飲むんだよ。いや、むさぼり食つて感じだつたな。鬼気迫る、さ。母親は何が起つたのかわからないし、彩花はヒステリー起こしてて吐かないし、俺が引つ張つて車に連れ込んで運んで行つたよ、病院に」「何も言えない。

「俺ももつ、死にたくなつたよ、あのときばかりは」「何も言えない。

もしかしたら、自分が彩花を汚したことが関係しているのかもしない、などと思っていた自分の思い上がりが嫌になる。「今日これから、見舞いに行つてくれるのか」と男は言った。これまで聞いたことのない優しい調子だった。

「はい」

「病室では、あまり刺激しないでくれ。まあ、お嬢さんなら大丈夫だと思つけど」

「どんなところに注意したらいいんですか」

「何を言いだしても、ふんふんつて聞いてくれ。さえぎつたりする」と、興奮するから

「はい」

「ありがとう。彩花も喜ぶと思つ

また、ゆつたりとした時間が流れそうになつた。

*

突然、『水車小屋』の戸が開いて、祐一が入つてきた。

「よお」と男は祐一に向かつてタバコの手を挙げた。

祐一は私の方を一度見て、そして男に向かつて「彩花さんは？」

と言つた。

「大丈夫だよ。たつた今、ここのお嬢さんにも説明したところだ。そうか、同級生だったな、祐一君は」と男。

「はい」と言いながら、祐一は立つたまま私の方を見る。疑惑が目に渦巻いている。面倒くさいな、と思う。

「じゃ、祐一君、お嬢さん、俺は行くよ」

男は立ち上がつた。

「清一さん」と祐一は挑発するような口調で言つた。「逮捕、されなかつたんですね」

「ああ。でも時間の問題だらう。リヤク専門のアナキストだからな、俺は

「リヤク？」

「そこのお嬢さんに聞いたらしい。じゃ」

男はタバコを灰皿に押しつけ、鞄を持つた。

「清一さん」と祐一は引き留めた。「歌は？」

「歌？」

「リートは？」

「やめたよ。とつぐに」

「どうして？ あれほど上手かつたのに」

ふつ、と自嘲するような笑みが男の顔に浮かんだ。

「歌が何の役に立つ？ この、全世界的規模で激化する階級対立の中で、歌なんぞ、麻醉薬でしかないさ。もうすぐ一九八〇年だ。安保はどうする？ それに二一世紀まであと二〇年しかないんだ。これからますます反動勢力と革命勢力との対立は先鋭化していくだろう。世界は変わりつつある。こんな切迫した時代状況の中で、百年以上前のドイツの歌なんか歌つてる暇があると思うか？ 状況は歌なんぞ許してはいられないんだ。わかるか？」

「わかりません」と祐一はふてぶてしい口調で言つた。

「どううな」と祐一の返事を予想したような男の自嘲的な笑みだつた。

「わからなくていい。お前は歌を続けたらいい。俺は俺の信じる道を行くだけだ。格好良すぎるかな？ お嬢さん」

いきなり話しかけられた。何も言えない。

「じゃ、あとは一人で楽しんでくれ」

男はテーブルに千円札を置いた。

そして言った。

「お嬢さん、わかってると思うが、彩花はかなり想像力が豊かだ。というより、妄想がかなりきつい。病院であいつが何を言つても、話半分、いや、話四分の一ぐらいに思つて聞いてくれ。とくに母親の話は」

「わかりました」

「ありがとうございます。さすがお嬢さんだ」

男はもう振り返り返りもせずに出ていった。

祐一は私の向かいに座った。

何から話したものか、空気が重くなつた。

*

祐一に彩花のことを簡単に説明した。

「どうしてここを知つてた？」と祐一は説明を聞いた後で言った。

「あなたこそ、どうして」

「ここは昔からあの人隠れ家だつた。で、お前は？」

「この間、清一さんにつれてきてもらつた」

「どうして清一さんと」

「関係ないでしょ、あなたとは」

「あの人危険だよ、セクトの……」

「わかつてゐるわよ、そんなこと」と私はいらついて祐一をさえぎつた。「今日は仕方なかつたでしょ。彩花のことを知りたかったんだから

「あのきょうだい、一人とも……」

「あぶないって、言うんでしょ、わかつてゐるわよ」

「じゃあ、なんで近づく

「そんなこと、あなたに指図なんかされない」

「うわさじや、清一さん、トルコ嬢のヒモみたいなことじつてるって」

ふう、と私は息をついた。バカな男、と思った。

何も答えず、半分残ったコーヒーに角砂糖を入れる。

トルコ嬢、ね。その子は多分、私の姉なのよ。

ゆつたりとした時どろか、雰囲気は尖った秒針だった。

「砂糖、入れるのか？」

「私の勝手でしょ」

同じ男なのに、あの男とはどうしていつも違うのだらう。

「部室に、行かないか？」

拒絶のほうが面倒な気がした。

それに、なんとなく、祐一に抱かれたい、という気持ちがあった。

「病院に行かなきや」

「途中だよ」

「じゃ、少しだけ」

(続き)

一三

祐一には帰つてもらい、病院へは一人で行った。祐一に抱かれキスした直後に彩花と三人で対面するのは耐え難かつた。

祐一の胸で泣いてしまったことを彩花に気取られるのも嫌だつた。

*

最近、よく泣く。

小学校の低学年以来じゃないだろうか。

毎日のように、いや、日に何度も、泣いている。

あの男が言ひように、もしかしたら、世界は変わりつつあるのかもしれない。

世界がもし変わるのだとしたら、自分は生きていけるだろうか。

反動？

革命？

わからない。

ただ、革命を信じるあの男が私の家を敵だと言つてはいる以上、もし革命が起こつたら私は生きてはいけないだろう。あの男は私を、殺すだろうか。

殺すだろう、と思う。

とびつきり、残虐に。

*

病室に入ると、彩花の顔に嬉しそうな表情が一瞬浮かび、そして疑問の無表情に塗りつぶされた。

「いきなり来て、『ごめんね』

「どうして知つたの？ あ、そこの椅子に座つてね

「先輩から、連絡があつて」と言いながら座る。

「そうか。おおとい、廊下で、三年生の先輩に会つて、言つちやつたの。自殺しましたって

「そつ」

「誰にも言わないでつて言つたのに」

「ひどいね」

「でもいい。あなたが来てくれたから」

「具合はいいの?」

「知つてるんでしょ?」

「だいたいね」

まさかここで体を求めてくることはないだろうとこう「安心感」がわかつた。だから沈黙も苦にならなかつた。彩花と一緒に外を眺めた。

*

「夏だあ」と彩花は言つた。

「夏ね」と私は返した。

「こんな夏、初めて」

「どんな夏?」

「こんな綺麗な夏」

「綺麗?」

「あなたがそばにいてくれて」

「そんな」

「本気よ。この汚れきつた世の中で、あなただけが私の救いよ」
彩花はまっすぐ私を見た。

それなのに目が合わなかつた。

「お願い、私を捨てないで。何にもしなくていい。いてくれるだけ
でいい」

「どうしたの? なんか変よ、彩花」

「変でなきや、自殺なんかしない」

「それもそうだ、と、一瞬、納得しそうになつた。

「私の母親はね、『屑よ』と彩花は言つた。来た、と思つた。

「そんな言い方しなくとも」

「お母さん、見たでしょ?」

「うん」

「ひどい酔っぱらこよ」

返事できない。

「私に、私に、死ねって言つたのよ、睡眠薬の瓶投げつけて、死んで見せろって。こんな母親がこの世にいていいと思う?」

返事できない。

「だから死んでやろうと思つたのよ。そしたら後悔して、お酒もやめてくれるかなって」

何も言えない。

たとえ後悔して、それでお母さんがお酒やめたって、そのときは死んでるのよ。

そんなこと、口が裂けても言えない。

「あの日、あなたに抱かれて、ものすごく幸せな気持ちでいたのに、あの母親が全部台無しにした」

何も言えない。

「あなたのこと、ワウワウだつて」

「何?」

「妖婦よ。その美貌で、男だけではなく、女も惑わすって。もうつれてくるなって。顔も見たくないって」

「そんな……」

「ひどいでしょう」

ひどい。

でも、それをまた私に言つなんて、彩花もひどい。

どうかしている。

普通じゃない。

普通じゃない……だから入院しているのだ、と自分に言い聞かす。

それに、それが本当だとは限らない。また彩花の妄想かも知れな

い。

「捨てないで」と無表情に彩花は言つた。

「何を言つてるの」

「捨てないで、お願ひ

「友達じゃない。あたりまえよ」

ふう、と彩花は長いため息をつき、「疲れた」と静かに言った。

「お母さんもね、気づいたみたい。私たちのこと」

「何を?」

「あの夜のことよ。タオル噛んでも、声がやつぱり漏れたでしょ。聞こえたらしいの。それで、あの日、起きてきて、もう寝床でお酒飲んでたらしくて、べろべろよ。降りてくるなり、お前は汚い、汚れてる、お前なんか娘じゃないって叫んで。兄貴の前での夜のこと、散々言われたの。あの女、ドアに張り付いて私たちのこと聞いてたのよ、きっと。もうほんとうにひどいことばっかり言うの。あんな汚い女だつたなんて、もう、うんざり。兄貴は間に入つて、どつちかというと私をかばってくれたけど、もつ我慢できなくて、お母さんこそ何よつて言い返したの。お父さんに新しい女ができたからって、私たちに当たらないでつて。お母さんこそ汚いよつて。まずお酒をやめなさいよつて。言つたの。そしたら薬の瓶が飛んできて、死ねって。お前なんか死ねって。ひどいでしょ。無茶苦茶でしょ。だからね、もう、ほんつとおに、生きるのに、疲れた。疲れた疲れた。疲れた」

何も言えない。

何を言つていいのかわからない。

あれを親に知られたなんて。

恥ずかしいなんてものじゃない。

嫌悪。自己嫌悪。

汚れた、と思う。

汚れるとは、こうこうことなのだ。

でも、どこまでが本当?*

「いつのままでいるの?」と私は聞いた。

「病院に?」

「そう」

「わからない。そんなの先生や兄貴が決めるんでしょ」「でも、体はもう大丈夫なのよね」

「頭が駄目つてこと?」

「どうなの?」

「そんなの、私にはわからないよ。だって、あなたとあんなことしてたってこと、それだけでじゅうぶん、変だもの」

「そうよね」と私もまた、諦念の返事をした。

あの夜の光景や声や感触。

もしあれを母親に知られ、なじられ、薬の瓶を投げつけられれば、私もそれを飲んだに違いなかつた。彩花に対する哀れみと嫌悪が同時に湧いてきた。

「私のこと、じつ思つてる?」と彩花は言つた。

「どうして?」

「好きか、嫌いか」

また始まつた、と思つた。さつさもその詰問を祐一から受け、体でじまかしてきたところだつた。答えようのない、袋小路。嫌悪といらだちと、でもそれをここでは押さえなければならぬといふ理性どがじつちやになつて、私を黙らせた。

「嫌い?」

首を振つた。

「好き?」

答えようがない。

「嫌いなの?」

「嫌いなら、ここにこない」

祐一の時と同じように答えるほかなかつた。

しかもここでは体に逃げることは出来ない。

「好きだと……」

「ちよつと待つて」と彩花をさくさく。

そしてまた黙る。やがてはいけないとあの男に言われていたことを思い出して。

「好きだと受け取つていいの？」

「彩花、前に言つたよね？ 私は人を愛せない人間だつて」

「うん」

「その通りなの。わかる？」

彩花は黙つている。

返事を待つ。

「祐ちゃんは？」と彩花は長い沈黙の後に言つ。

「彩花と同じよ。好きじゃないわ。嫌いじゃないけど」

「あなたは、誰だつていいの？」

「どうして」とついて我慢できず言つてしまつ。「どうしてそんな

失礼なこと、平氣で言つの？」

「だつて」

「だつて、じやないでしょ」

「だつて……」

「彩花も、祐一も、なんで私を問いつめるの？ 追いつめるの？ どうして言葉にしたいの？ なんで、黙つて抱いてくれないの？ 好きとか嫌いとか、そんなの、簡単に言葉に出来るわけないじゃない！ 勝手に自分から求めておいて、抱いておいて、それで好き嫌いかななんて、勝手に聞かないでよ。私にわかるわけ、ないじゃない。私から求めたんじゃないんだから。勝手に求めて来て、勝手に抱いて、それで……」

これは言つてはいけないとだつたかも知れないと氣づき、黙る。

静かに泣きだす彩花。

もう遅い、と氣づく。

来るんじやなかつた。

来てはならなかつた。

泣きだしたい。

でもここでは泣けない。

「ごめんなさい」と、あつともいひながら、それでも謝る。

「あなたは、綺麗すぎるのよ」

「私が？」と驚いて聞き返す。

「それに気づいてないのも、あなたの罪よ」

「罪？」

「美しさって、それだけで罪だと思つ。それにあなたの場合、心の殻の堅さが加わつてゐる。これは罪よ。絶対に」

「わからない。何を言つてゐるのか」

「いいのよ。わからなくて。わかつたら、あなたこそ、死ぬかも知れないから」

「わからない。何が言いたいのか。」

*

ノックされた。

看護婦さんが昼食を運んできた。

それを潮に、じゃあ、今日はこれで帰るね、と言つて立ち上がる。

「もう、来ないで」と彩花。

「……」

「……お母さんと鉢合わせしたら、どうするの？」

想像して、また絶句する。何と言つていいかわからない。

「大丈夫、すぐに退院できるから。こっちから連絡する」

「うん。待つてるから。お大事に」

「またね、と言いながら、彩花と田は合はわなかつた。

「どうより、田が合わなかつた。」

(続く)

一四

彩花のことが気になりながら見舞いにも行けず、たまに部室で祐二とキスしたりしながら、夏休みも半分が過ぎた。

夕方に秋の風が吹き始めれば、もう祖父の初盆だった。

*

小さい頃、お盆に、うちの菩提寺に行くのが嫌だった。地獄図を見るのが。

特に、両脚を開いて逆さまに縛りつけられた女の図。和尚は、一夫にまみえるところなる、と言った。死んでから夫たちが女を奪い合つて、股からノコギリで二つに裂く、と。

恐ろしい。

そんな恐ろしい罪を犯す女がいるのだろうか、と思つた。今思えば、罰が恐ろしいからといって、その罪が本当に恐ろしいことだとは限らないのに。

罰の恐ろしさで、罪の恐ろしさを印象づけようとすることもあるだろう。

これは一種のペテンだ。

なのに、今も、恐ろしい。

祐二と彩花が私を奪い合つたら……。

*

八月十五日。

祖父のいない女だけの精霊流しになつた。そして思つた。

祖父の精霊は何処に帰つてきたのだろう。

仏壇のある場所だというのなら、家だ。

でも、祖父は家には帰つてきてはいなにような気がする。

祖母はどんな気持ちで伏せ鐘を叩いているのだろう。
そういえば、母は、どんな気持ちだったのだろう。

どんな気持ちでお鈴を叩いてきたのだろう。

お盆にも、父の精霊が家に帰ってきたはずはないのに。

*
木魚を叩きながら考える。

ノコギリで裂かれるべきは、本当は男ではないのか、と。

*
精霊の乗った船が西の方へと消える。
精霊流しが終わる。

*
八月十六日。

百万遍供養。

八年ぶりの百万遍は、私にとっては、もはや異国の土俗でしかなかつた。

本尊の前では数十人の男女が丸くなつて座り、巨大な数珠に繋がれている。

そして和尚の木魚に合わせつつ、「なんまいだあなんまいだあ」を唱えながら、梨ほどの大きさの数珠玉を手から手へと渡す。

その大人たちの輪の中では、子供たちの小さな輪が、大人たちを真似て「なんまいだあなんまいだあ」を唱えながら、ここでも数珠を回している。

*

その回の念仏が終わつた。

数珠が置かれ、輪が解かれた。

和尚は壁に掛けられた地獄図極楽図の前に善男善女をいたなう。

和尚は、待ちきれずに「ねえあれはあれは？」などと先走って聞く子供やそれを制する大人たちに向かつて、私の小さい頃と同じよう、地獄についてやたら詳しく、極楽についてはぐくあつさりと、説く。

*

人は、幸福よりも不幸の細部にやたらとこだわるものなのだ。
ただ、不思議なことに、例の女の説明がない。

あんなものはどこにもなかつたのか？

それとも、最近ではもう説明しないのか？

わからない。

絵の中に探す気もない。

*
数珠の輪には結局参加せず、本堂を出て閻魔様のお堂を見る。
と、その前には初盆の者の名の書かれた紅い提灯がいくつも揺れ
ている。

もちろん祖父の名もその提灯に黒く大きく書かれている。
夜の闇の中、祖父の名の書かれた紅い提灯がこうして閻魔様の前
に架けられている。

何か気分がざらつぐ。

なぜ祖父は、と思う。

こうして閻魔様の前にまるで晒し者のように吊され、線香の煙に
燻され、読経の声と木魚の音にふらふらと揺れていなければならな
いのだろう。

それに一瞬納得がいったようで、何か不愉快で、理不尽なものを
感じた。

むしろ怒りに近いものがこみ上げてきた。

いったい、こうして、鬼火になつて吊され晒され、閻魔様に裁か
れなければならないようなことを、生前、祖父がしたというのだろ
うか。

もちろん、しただらうとは思つ。

あの男に言わせれば、極道地主なのだから。

しかも、妻を捨て、他の女のところで、子供まで作つて、そこで
死んだような男だ。

けれど、それでも、祖父には閻魔様の前を素通りして極楽へと導

いても「うるだけの理由がある」と私は思つた。

根拠はない。

ただ、私に、私のような者にも優しくしてくれたという理由だけで、閻魔様の裁きを免れて当然だと思った。

そして、ふと振り返り見れば、そう思う善男善女のひと群が、ほんの一瞬、数珠につながるための百万遍供養なのだった。

閻魔様の前で苦吟している精霊たちのために、今生きている私たちこそが、あの大きな数珠の鎖に繋がれ、念仏を、唱えなければならぬのではないか。

*

本堂に戻る。

小さい頃は正視できなかつた地獄図の前に立ち、「なんまいだあなんまいだあ」が一段落つくるのを待ちながら、あの女の絵を探す。いた。

逆さにつるされ、股をノロギリで裂かれ、苦悶にゆがむ表情のその口元には、けれど、奪い合われるこの、かすかな悦楽が浮かんでいる……。

*

逮捕された学生たちは釈放された。

証拠不十分だということだった。

警察の見込み捜査が云々、といった記事が新聞に載つていた。

(続く)

一五

祖母が、ちょっとといい? と部屋に入つてくる。入つてくるなり、祖母はゆつくりと、よいしょ、とベッドの端に腰掛ける。

「あの男の人にはつたの?」といきなり聞かれる。けれど詰問ではなく、優しい口調だった。喋つてもいいかな、と思つた。

「実はね、親友のお兄さんだったの」

「彩花さんでしょ?」

驚いて祖母の顔を見る。

「知つてゐるの?」

「弁護士に相談して、この件も依頼したの。彩花さんのお兄さんと話しあつたらしい」

「お祖母ちゃん?」

「なに?」

「私、ほとんど知つてゐるから」

「お兄さんから、聞いたでしょ」

「うん」

「どう思つ?」と祖母。

「お金くらい、出してあげてもいいんじゃないかって、思う

「私もそう、思つてゐるのよ」

「でもね、と祖母は疲れた様子でため息をついた。

「でも、おかあさんは、絶対に認めないだろ? ねえ」

「うん」と答えるほか、なかつた。

沈黙があつた。

「でもね」と私から口を開いた。「お金を渡したとして、それでお姉さんにそのお金が行くのかしら。あの男のセクトに行つたりする

「んだったら、嫌だ」

「セクト?」

「あの男の、アナキストの」

「セクトよりもね、まあはあの子の、育ての親の借金の方に行くと思つたよ」

「借金?」

「五百万くらいあるんだって。それをあの子は一生懸命返してゐるよ」

「どうやつて返してるか祖母は言わない。」

「お祖父ちゃんのお金を、少し出したやつたけど、あなたは、いいかなあ」

「私は、もちろん、いいよ」

「私が死んだとき、あんたが受け取るお金が減るよ」とになるよ」

「そんな、不吉なこと言わないで」

「もうそろそろ、そういうことも考えとかないと、あとであんたたちが困ると思つたじね」

「そうかも知れない、と、ふと思つ。」

「おかあさんには黙つててね」と祖母。「むかし、私も、じつそり会いに行つてたのよ。あの子に」

「考えてみれば、あの子こそ、お祖母ちゃんの初孫なのだ。

「おとうさんのところに?」

「ううん、その後よ。親戚に貰われていつてからよ。かわいそうに、まともな服も着せてもらつてないの。お小遣いを渡してもすぐに親戚に取られるだらつから、お小遣い欲しかつたら、家においてつて言つたのよ。たまに来てたの、知つてるでしょ?」

「うん、とうなづく。」

「かわこやつて」と祖母は言つた。「じつじつこんなことになつたんだろ?」

「答えようがない。」

「よこしょ」と祖母はベッドの端から立ち上がる。

「じゃあ、そういうことをするかい」

「うん」

振り返りながら、

「彩花さんのお兄さん、悪い人？」と聞かれる。

「わからない。私にはあまり悪くは見えない」

「弁護士の先生もそう言ってた。主義者だけど、信頼は出来るって」

「信頼できるかどうかは、わからなかつたけど」

「うん……じゃあ、このことは、おかあさんには、内緒ついで」

「じゃあね」

祖母は部屋を出ていく。

これでいい、と思つ。

会うことはない姉に、私が今、してやれる精一杯のことだ。
ちょっと満足した気分になる。

*

突然、物凄い音。

階段から何か堅くて重い物をいくつも転がすような。
何か落としたんだろうか。

まさか！

と思いついて廊下に出る。

階段へと歩く。

見下ろせば、一階に祖母が倒れている。

奇妙な格好で。

駆け下りて、声をかける。

うめき声。

母を呼びながら、電話に走る。

救急車、呼ばなくちゃ。

指が震え、なかなかダイヤルを回せない。

たつた三つの数字なのに。

つながる。

「火事ですか、救急ですか」などと聞かれる。

火事なんて、なんてバカなことを聞くの！
「お祖母ちゃんが階段から落ちたんです！」

* 少なくとも大腿骨は完全に折れている、と主治医は言った。
ぼつくり、と言った。

意識が戻つても、寝たきりになるかも知れない、と。
しかたがありません、と母は言った。

* 毎日、病院に通つた。

意識が戻るまで付き添いは要らないと言われたけれど、病室は冷
房が効いていて、勉強がむしろはかどつたから。

* 四日目、祖母がこちらを見ているような気がした。

意識はまだ無いはずなのに。
けれど口は確かに動いている。
私に何かを言おうとしている。

「何、お祖母ちゃん？」
と、耳元で叫んでみた。

うめき声から、何か、言葉のようなものが切れ切れに聞こえてき
た。

「…………み…………」

「み？」

祖母はうなづく。

「…………つ…………」

「ち？」

うなづく。

「…………」

「じっ？」

「…………」

「…………お…………」

「…………」

「……か……」

「……ね……」

言い終わつて祖母は大きくうなづく。

「み・ち・こ・に・お・か・ね?」

復唱すると、こんどは微笑みながらうなづく。

「みちこさんつて、お姉さんのこと?」

うなづく。

「わかつた。彩花のお兄さんに会つたらいいの?」

うなづく。

あの男とちゃんとした用事で会える。

そう思うと、何か、恋人との関係を認めて貰つたような、ちょっと浮わついた、嬉しい感じがした。

「明日、会うね」

うなづきながら、祖母は嬉しそうに微笑んだ。

こちらの浮わつきが伝染したような笑みだった。

*

意識が戻つたことを主治医に報告した。

ほう、と主治医は驚いたように言った。

実はもう意識は戻るまいと思つてました、と主治医は病室へと歩きながら淡々と言つた。

それほど深刻だったということを、初めて知つた。

*

翌日。

母は朝早く、祖母に付き添つたため病院に出ていった。

私は朝食もとらず『水車小屋』に来て、モーニングサービスといふものを初めてたのんだ。

サービスの中身はトーストとゆで卵。

トーストは厚切りでたっぷりのバターが塗られ、ちぎつて口に入れるときつくりとして香ばしかつた。

おいしぃ。

家で焼くのとぜんぜん違う。

ゆで卵も、半分に割つてみると黄身の中心がオレンジ色で、家では食べたことのないような複雑な味がした。

半熟とは「うごう」となのか。

「コーヒーはモカにした。

あの男のまね。

*

男は『水車小屋』の戸を開け、私に気づくと凍りついたようになつた。その露骨な驚き方に私は少し傷ついた。これほどあなたを待つていたのに、もつと嬉しそうにしてよ、と、私の勝手な思いこみ。「よう」と男は、驚いたのを照れたのか、いつもより親しげに言った。私の前に座つた。

「お祖母ちゃん、大変だつたな。大丈夫か?」

「知つてゐるのね」

「もちろんさ。大事な交渉相手だから。具合は?」

「昨日意識が回復したの」

「そりやよかつた。何か言つてたか?」

「そのことで来たのよ」

「だらうな」

「どうぞ、先に注文して」

「ああ。マスター」と男はカウンターの方を向いた。「キコマン」

「あれ、モカじゃないの?」

「最近はこれ。お嬢さんの香りだからね」

「私の意見は」と私は少し照れ、話を戻した。「お祖母ちゃん一緒に。お姉さんに出来るだけのことはしてあげたい」

「殊勝だな」

「きょうだいなのよ」

「きょうだいって意識、あんたにあるのか」

「本当のところは、よくわからな」。きょうだいってのがどんなのか

か

「どううな

「で、一つ聞きたいの

「なんだ

「お金、絶対に姉に行くんでしょうな

「そりゃ行くわ。他のどこに行く

「親戚、とか

「それは仕方ないだろ。聞いたんだろ？ 借金のことは

「うん

「それが問題なのか？」「

「ううん

「何だ？」「

「私は言つのを少しだめらつた。

「あなたのセクト」「

「そうこうこととか

「そう

「それはわからんよ。金の使い道は彼女が決めたらしいことだ。親

父さんが命をかけて守つた党にカンパしてくれるつて言つたら、断

る理由はないだろ」「

「あなたのセクトにお金が行くようなら、そんなお金は出さない

「そう、お祖母ちゃんが言つたのか？」「

「これは、私の意見よ

「どううな

「どうして

「あなたのお祖母ちゃんは、そこまで気が回つてはいまい。孫可愛
さで、孫をトルコ風呂からすくい上げられたつて、それだけだろ
う。そのためなら、セクトであろうが、やくざであろうが、手を組
むつもりなのさ。ひがうか？」「

その通り、だと思つ。

「で、あんたは何しに来たんだっけ

「私、わたしは……」

何をしに来たんだろ？

交渉はすべて弁護士がやつて いるはずなのに。

何をしに来たんだろ？

でも、「何しに来た」なんて、そんな言い方はないじゃない！

「あなたに会いに来たの」と思い切つて言つ。

「それはわかつてゐる。その目的を聞いてるんだ」

「それが目的よ。あなたに会いに来た。それだけ」

「妹だけじゃ足りず、その美貌で兄まで餌食にするつもりか」と男は言つた。嫌らしい口調ではなかつた。むしろ爽やかな言い口だつた。

「そうじやない。お祖母ちゃんの言つたことをあなたに直接、ちゃんと伝えなきやつて、思ったのよ。『みづこ』におかね』つて言つたのよ。意識が戻つた、その最初に」

「そうか。けつこう感動的だな」

気がつけば、男も私もコーヒーを半分飲み終わつっていた。
コーヒーに角砂糖を一つ、入れた。

男も同じようにした。

顔を見合わせて笑つた。

*

「ミチ」「さんも、同じよつ」するの？」

「ああ。お父さんのお父さんのまねだつてよ」

「お父さんも、お祖母さんのまねなのよ。本当は」

「そうなのか。お祖母さんも、若い頃はハイカラだつたんだろ？」

「でしおうね。戦前から「コーヒーを飲んでたなんて」

「名前も聞いたんだな」

「え？」

「ミチ」「あんたの姉さ。可能性は未知数の子

「未知子さん、ね」

「お祖母さん、何か聞いたかい？俺のこと」

「悪そうな人かつて、聞かれた」

「どう答えた？」

「悪そには見えないって」

「そりや そりや。」れども正義のために戦つてゐんだからな

「正義？」

「社会的正義さ」

「会社を爆破したり、飛行機を乗つ取つたり、人を殺したりが、正義なの？」

「いろんなセクトのことが、ひちやになつてゐるが、まあいいだろう。いいか？ 新しい建物を建てよつとする。けれどそこには古い建物が、デンと居座つてゐる。あんたなら、どうする？」

「古い物は壊してどけるつて言つの？」

「それ以外、どんなやりようがある？」

「古い建物がもうだめだつて、どうしてわかるの？」

「そんなの、新聞を見りやわかるだろう。テレビだつて同じだ。毎日のニュースを見てみろよ。陰惨な事件や、腐敗しきつた政治、子供たちの悲惨な現状を見る。もう古い体制がもたなくなつて、あちこちでヒビが入つてゐる証拠なんて、いちいちあげるのもばからしいくらいだ。この資本主義体制はもう何年ももつまい。いや、もたせちゃいけないんだ」

「でも、古い建物にも、人が住んでるでしょ」

「ああ」

「どうするの？」

「どいてもらはしないだろうね」

「嫌だつて言つたら？」

「嫌だつて言いながら、どいてもらはつた」

「それが革命？」

「そう。よくわかつたな」

「どかなかつたら、殺すわけね」

「それが歴史的必然だとしたらね
人を殺すことさえ、必然なのが。

「私は、怖い」

「なにが？」

「あなたの言ひ、革命が」

「そりやそりだらう。あなたは革命によつて没落する側の人間だから」

「そりやのかしら。違ひと思ひ。もつと違つた意味で……」

「違わないよ」

断固とした調子に、言ひ返せない。

黙り込む。

「いや、違ひかもな」と男。「あなたはもしかしたら、この世界そのものが怖いのかもな。あなたは生まれながらの余所者だよ」

「余所者？」

「そりや。この世を自分の居場所だと感じたことはあるか？」

「ない、と思ひ」

「あんたは多分、革命状況の中でも、革命後の社会でも、余所者であり続けるさ。きっと」

「じゃあ、あなたが革命を起こしたら、私を、殺す？」

「なぜ？」

「没落しつつある側の人間なんじょ」

「それだけでは殺さないよ」

「どうだつたら、殺すの」

「殺さなきやならないよ」の必然性があれば、さ

「必然性、ね」

「なんだい？」

「なんだか、その『必然性』つて言葉、嫌」

ふ、と男は笑つた。

「貴族趣味だ」

「かもね」と答え、私も軽い笑みを笑んだ。

私のことを、余所者、と、この男は言つた。この男は私を理解してくれている。

「『冬の旅』、知っています?」

「シユーベルトの、か?」

「はい」

「あれがどうした

余所者は、私、ここに来て、
余所者のまま、去っていく。

「あんたそのものだな」

男はドイツ語で、軽く節を付けて繰り返した。

F r e m d b i n i c h e i n g e n o g e n ,
F r e m d z i e h i c h w i e d e r a u s .

「歌つたことあるの?」

「昔ね」

「聞きたかった」

「よせよ、冗談は。で、どうする? 交渉は、一応成立でいいのか
な。全部弁護士に任せることで」

「一つ、条件があるの」

「なんだ」

「姉に、未知子さんに会わせて」

「あんたのために言うんだが、俺は会わない方がいいと思う」

「前は、そのうち会わすって言ったのに」

「あの時は」と男は口ごもつた。「あの時だ。あの時はお嬢さんが
こんな人だとは知らなかつたから

「私つてどんな人?」

「ま、その話はやめとこひ。それより、本当に会いたいのか?」

「会いたいの。あなた、同棲みたいにしてるんでしょ」

「そんなことはない。たまに連絡のために行くだけさ」

「私も連れて行つて欲しいの」

男は私の目を見た。

「ま、考えておくよ」

「それからもう一つ聞きたいたの」

「なんだ」

「なぜ、あなたなの？」

「どういう意味だ」

「私が聞いてるの。なぜあなたが私の姉のこと……」

「偶然だろう」

「必然じゃないの？」

「これは多分、違う

「自信がないのね、多分、なんて」

「自信なんて、この俺にあるわけがない」

「そう？ 口調はいつも自信に満ちてるけど」

「それは自信のなさの裏返しさ。確信とか、自信とか、そういうものとは、もともと縁が無いんだ、俺」

「本気？」

「もちろん」

「それで過激派だなんて」

「ははは、お嬢さん、それは言わないでくれ。自分で変に思つ」と
もよくあるくらいなんだから

「未知子さんとは、どこで？」

「党が革命戦士の追悼集会をやつたのさ。そこに来てたよ。未知子さんには党の幹部が連絡を取つたんだ。未知子さんが遺族代表で祭壇に花を捧げた」

「遺族、か」

「あんたもそうだったな」

「考えたこともなかつた」

「父親がアナキストだつたつてことを、か？」

「そのことを、まず、知らなかつたんだから」

「ショックだつた？」

「お父さんも、あなたみたいに、必然性、なんて言つたかしり」「子供には言わないだろ？」「

「必然性があれば、お父さんも人を……」「

「本当の戦士なら殺すだろ？」「

「私、お父さんには、殺せないと思つ」「

「どうして」「

「あなたと同じ。人を殺せそうじゃないから」「

「人は殺せないかも知れないが、敵は殺すよ」「

「敵は人じゃない？」「

「……この話はもうやめよう。さて、俺は行くよ。で、どうしたらいい、連絡方法は？ どうせあんた、お母さんには黙つて来てるんだろう？」「

「そうよ。そうね、彩花に言付けるか……」「

「どうやつて？」と男は言った。優しい口調で。

「そうよね。まだ病院だものね。そうだ、彩花、休み明けには学校に出来られそう？」「

「それは問題ないと思う。母親をまず入院させてって手順があるから、病院に入れてるだけさ。いつでも出られる」「

「会いたいな」「

「寂しいか？」「

「そういうんじゃないけど、病院でどんなこと考えてたのかなって、聞きたい」「

「うん。で、俺の連絡は？」「

男は時間に焦れているようだった。

「じゃあ、休み中の昼過ぎだつたら、家に私一人だから」「

「電話したらいいんだな」「

「そう」「

「じゃ、俺は行くよ」「

*

男は『水車小屋』を出ていった。
ふと、寂しさがこみ上りてきた。
私はどこにも行くところがない。
やつぱりどこにいても余所者なんだ。
ひとりなんだ、と思った。

(続く)

一六

夏休みが終わりかけ、世界が変わったような気がしていた。
確かに何かが変わった。

終わりかけた夏、死にかけた夏の空氣の中で、私の何が変わった
のか、世界が変わったのか、わからない。
こういう感じは、むかし一度だけあった。

*

あれも銀木犀の下だった。

*

いつも、節句には、陽の当たる庭がステージとなつた。
銀木犀の陰に入った縁側が客席だった。

日向のステージで、小さいころの私はいい気になつて振りを付け
て歌い、レコードや母の琴に合わせて踊るのだった。

祖父や祖母や父や母が手をたたき、そのわきには祖母の手作りの
稻荷寿司や巻き寿司、お重の中には赤飯と季節のもの。

私は祖母の作った生姜の梅酢漬けが好きで、それを囁りにステー
ジから客席へと乱入したりしながら、幸せだった。

*

あれは何の節句だったのだろう。

祖母も祖父も母も父も縁側にいた。

私はテレビでチャイナドレスを着た女がやつた通り、皆の、いち、
にい、さんに合わせて帽子を取つた。

羽ばたく音と共に樹下を軽く旋回して青空に舞い上がつていく数
羽の白い鳩、驚嘆する皆の顔、拍手。

……すべては幻と消え、幼い母のお気に入りのオモチャだったと
いう、満州の小さな紅い手風琴だけがそこにゴロリと転がつていた。
観客よりも私の方が呆気にとられていた。

「鳩は？」と私は母に聞いた。「テレビで、これを、いつやつたら、鳩が出たの」

一瞬の間の後、客席では爆笑が起つた。

笑いながら祖母が言った。

「それは手品よ。手品には、種があるのよ」

今思えば、このときの祖母は私に何も説明していない。手品を知らない子に、それは手品よ、と言つたところで、おまけに、手品には種があるのよ、などと付け加えたところで、いつたい何をどう説明したことになるのだろう。

それでも私には祖母の言葉の全てが一から十まで理解できた。手風琴から鳩は生まれない。

手品には、種がある。

あしもとに無惨に転がつた古ぼけた手風琴。

手品に種のある、この世界の神秘と真実の圧倒的な証拠。

私は自らの無知と非力を知つた。

そしてあまりの屈辱に号泣した。

私は、このとき、手品に種のあるこの世界が、私の皮膚の内と外から隙間なく私に重なつてくるのを感じていた。

私はこの世界に重なり、この世界は私を取り込んだのだった。

私は、この世界が私を抱擁し浸食し取り込んでしまうのに何一つ抵抗できぬまま、ただ泣いていた。

そしてこの世界と重なる痛苦に堪えて、私が私へと生まれ変わりつつある私を眺めながら、客席の大人们は大笑いに笑いつつ、私を祝福し続けた。

*

私が生まれたときと同じ、私をこの世界へと歓迎する儀式だった。あのとき私は死に、私は生まれた。

*

世界のすべてが私を祝福していた。

手品に種のあるこの世界へようこそ。

神秘に満ちたこの世界へよつゝか、と。

*

信じがたいほどの屈辱を味わい、私は、世界を知った。

私自身を知った。

楽園を追われた私はこの薄汚い世界へと投げだされたのだった。

*

そして今もまた、世界が私に被さつて来つた。内と外どが重なり合い、私を隙間なく埋め尽くす。世界が変わらのか、私が変わらのか。

*

彩花が言つよう、この夏はとびきり美しかった、と思つ。
……残酷なほど。

(続く)

一七

『死と乙女』のレコードを買った。

母が出ていつて一人になると、居間のステレオにかけて聞く。

第一楽章がいちばん好き。

死神と少女の対話。

きつと少女は自分から死神を呼んだのだと思つ。

呼んでいながら、恐ろしくなつた。

でも、もう遅い。

死神の優しい腕が少女を包む。

* 音楽に浸つていると、電話のベル。

きつと祐一から。

母親がいない時間を教えているものだから、堂々とかけてくる。

これから会えないかつて言つんでしょ。

ちょっとだけ渋り、結局、従つことになるんだけど。

*

ここ数日、祐一と会つてもあまり口をきかない。

抱かれて、キスするだけ。

しゃべる祐一は鬱陶しい。

*

祐一「じゃなかつた。

「お嬢さんか?」

あの男だった。

「はい」

「心なしか、声が弾む。

「未知子に会いたいか?」

「うん」

「『水車小屋』に住所を書いた手紙を言付けておいたから。受け取つてくれ」

「どうしてそんなこと……」

「すまない。たぶん、もう会えないだろ?」

「会えない?」

「お嬢さんを巻き込んですまない。あんたとは、こんな形でなく、出会いたかった。じゃ……」

「待つて」

「……なんだ」

「嘘でしょ?、会え……」

電話はいきなり切れた。

彩花の自殺未遂を知らされたとき以上の恐怖がかぶさってきた。死神のマントを、いきなり、バサーッとかぶせられたようだつた。待つて、行かないで、と叫びたかった。

*

『死と乙女』が第四楽章に入つたところだつた。

*

『水車小屋』に自転車で走つてきた。

マスターに言つと、すぐに手紙を渡してくれた。

白い封筒。

あの男がいつも座つていた席に座り、モカを注文した。封を切る。

でも、恐ろしくてひらけない。

躊躇しているうちにもうモカが来た。

あの男の香りだつた。

その香りに励まされるよひ、手紙をひらぐ。

……

「こんなことになつてすまない。」

残念だが、これも必然性があつたのだと思つてくれ。

未知子の住所を知らせておく。

ただ、前にも言ったと思うが、

未知子には会わない方がいいと、俺は思う。
未知子と君とはあまりにも違うすぎる。
今会うのは、お互に不幸だと思つ。
会うべきときが来たときに、会えばいい。
その時は必ず、来る。

W町X通りYのN くすのき荘201

ここで手紙を終えられたら、どれほど格好いいか。
ひどくみつともない、ということを承知で、書く。
会えれば会うほど、喋れば喋るほど、お嬢さんに惹かれた。

君はもつと自分に自信を持つていい。

殻を破るんだ。

少なくとも俺は、君に会えてよかったです。
もつと色々なことを語り合ったかった。

もう一つ。

申し訳ない。この間は嘘を言った。

彩花は特別病棟に移した。

あれから何度も死のうとした。

狂言かどうか、もうわからない。

きっとしばらく、出られないだろう。

医者は、今年中の復学は無理だと言つている。
もう一つを気にかけてやれるのは君だけだ。
お願ひだ。あいつを見守ってくれ。

すまない。

そしてありがとつ。

君に会えてよかつた。

それでは、さよなら。

*

田の前が暗くなる。見えているのに、暗い。何も読めない。

*

さよならつて、なに？ 嘘でしょ。どうしていきなりこんなことになるの。いったい何がどうなったの。知らないよ、何も。だつてこの間までここにいていろんなこと話したじゃない。あの自信たっぷりな口調でなんでも断定してたじゃない。彩花だって元気だつたよ、もうすぐにも退院できそうな感じだったのに、どうして特別病棟に移されなきゃならないの。病気なのはアル中のお母さんでしょう。復学は無理なんて、「冗談」でしょう。でもいいの、彩花のことば。それよりあなたよ。清一さんよ。どこに行つたの？ 青いインク。万年筆ね。こういう趣味なんだ。そうよ革命を起こすんじやなかつたの？ 革命を起こして必然性があれば私を殺すんじよ。反動の極道地主の孫なのよ。どうしたのよ、リヤクは？ 徹底的にリヤクするんでしょ。逃げるの？ 私から逃げるの？ 卑怯よ、あなたは卑怯よ。それにしてもいきなりどうしたの？ まさか死ぬんじゃないでしょ。そんなことは許さないわ。私に黙つて死ぬなんて。でもあなたが死ぬわけがないわね。思つたより汚い字ね。急いで書いたのかしら。死ぬなんて、そんな理由がない。じゃあいつたい、どこへ行くの？ 外国なんてありえないわね。いえもしかしたらそうかもしれない。それなら帰つてくるはずよ。どうしたのこの悲壮な調子は。それにこれは愛の告白なの？ それにしてはあつさりしそぎでいるじゃない。でも、これがあなたらしいのかもね。ありがと、あなたのことが私も好きだったんだと思うの。なのに、告白が遅いわ、遅すぎるじゃない。あなたはどこにいるのいつたいどこにいるの。どこにどこにどこに。なぜ消えたの。

*

「清一さんどこかに行くんですか」とさりげなくマスターに聞いて

みる。

「知らん」と一言だつた。

*

書かれていた住所、X通りはK市でも有名な悪所だつた。
口には出さないものの、誰もまともな女性は近寄らうとは思わない。

住所を口に出すだけでも汚れる感じがする。

祖母からも、母からも、友達からも、女性の誰からも、その住所
が口にされるのを聞いたことはない。

そこに、姉が、未知子さんがいる。

あの男の消息を知つていそうな、唯一の人。

行くの？

行かなきや。

自分を奮い立たす。

あの男の香りのするバー、さめたモ力を一気に飲み干す。

行かなきや。

昼間のうち。

*

玄関の間口が広いだけの、じく普通の商家が建ち並ぶ通りにしか
見えなかつた。

住居表示をたよりにふらつこつてみると、祖母ほどの年齢の女性に
声をかけられる。

「あんた、どこの中

「K学院です」

何かとんちんかんな答えをしてしまつたことが女性の表情でわか
つた。

「どこか、探してるの？」

「YのZのくすのき荘なんですが

「誰かいるの？」

「知り合いが

「一いつ田の角を行つたら、すぐだよ。早く。あんまりこの辺をふらふらしてゐんじゃないよ」

恐ろしくて、すぐに自転車に乗つた。

『ぐすのき荘』

と看板の出でいるアパートまでそつ遠くはなかつた。

一階建て、瓦葺き。古い建物。

郵便受けを見る。

201 田中未知子

いる。

ここにあの女の子がいる。

小さい頃からうつりに来ていたあの子。

父の子。

姉。

そしてあの男の消息を知つてゐるかもしぬない人。

*

けれど、自分は何しに來たのだろう。何から話しか始めたらしいのか。

こんなにちは、お姉さん。でもないだろう。

お金、受け取りましたか？ とでも言つのか。

祖母が倒れました。そんな、何日も前のことの報告のためにこんな所に來るのか。

だめだ。勇気がわかない。

*

けれど、もしかしたら、あの男からの伝言が、あるかもしぬない。あの男のことだ、私を試したのかも知れない。本当にここまで來ることが出来るかどうか。それでこここのドアを開けたらあの男がいて、「よう、なんて、また手を挙げて迎えてくれるかも知れない。あり得ないことではないし、それにこんなに早くやつてくるとは思わず、まだここで身支度をしてゐるかもしない。あの男に会える、これが最後のチャンスかもしれない。行け、行くのよ！

*

ぎこちないと軋む階段を一歩ずつ踏みしめながら一階に上がる。

と、そこがもう201。

ベルを押す。

無機質な音が続く。

何も返事はない。

もう一度押す。

いない。

*

安心し、そして途方に暮れる。

自分はいったい、どうしたらいいのか。

(続く)

一八

「何があつた？」と祐二。

いちばん聞いて欲しくない」と。

あなたは黙つて私を抱いていてくれればいい。

「何もないわよ」

「いいや。お前から俺を呼び出すなんて、何かあつたんだ」

「あつたけど、言わない」

抱いていた手が肩に置かれ、突き放される。

「いきなり何よ！」

「お前にとつて、俺は、何だ？」

「何だつて、何よ？」

「俺の何が欲しいんだ？」

「欲しいって、何なのその言い方は…」

私もつい激してしまつ。

「欲しいんだろ！ 俺の体だけが！ 違うのか？」

その通り、と氣づき、愕然とする。でも、

「そんないやらしい言い方はないじゃない！ あなただつて、そうじゃないの、私を抱きたいんでしょ！」

「違う！ 違うんだ。もつと違うつながり方をしたいのに、お前はいつも突き放す」

「突き放してなんか、ないわよ」

「だつたら、もつと話してくれよ、いろんなことを

「これ以上、話すことなんか、ないよ」

「俺には、か？」

「ううん。誰にも」

「だからお前はひとりなんだ」

「何？」

「ひとりだつたろう、これまで」

「友達くらい、いたわよ」

「でも、心を許したはずはない。違うか？」

「そんなこと、今は関係ないでしょ」

「言いながら、何か悲しいものがこみ上げてくる。

その通り。

ひとりだつた。

誰にも心を許したことはない。

許されたこともない。

表面だけ。

仮面だけ。

突き刺されたこともない。

突き刺したこともない。

冷ややかに眺めていた。

通り過ぎただけ。

行き過ぎただけ。

彩花でさえ、遠い人になりかけている。

「今は関係ないでしょ」と私はやつと繰り返した。

「関係あるさ！ これまでこんな言い合いでしたことあるか？ 本気で言い合いでしたことがあつたか？ どこかで余裕をもつて、表面をなでさすつてただけだろ」違うか

「そうよ」と言い返した。「それのどこが悪いの」

「お前にとつては悪くはないさ。ただ、お前に本気で触れた連中、みんなが傷つくつて言つてるんだ。彩花は自分が傷ついてしまうタイプだけど、お前はみんなを傷つける。見て見ぬ、回りを、みんな傷ついてるだろ」

「そんな言い方、しなくてもいいでしょ」

その通りだから。

もう私は負けを認めているんだから。

もう許して。

黙つて抱いてよ。

「何があつたんだ?」

「清一さんが、消えたのよ」

「どこに?」

「知るわけないでしょ!」

「清一さんと……」

「何もないわよ。話してて楽しかつただけ

「あの人は……」

「危ないって言つんでしょ。わかってる。でもね、私の前ではそんなじやなかつた。何でも話せたのよ。あの人前でな」

「俺は」と祐一は静かに、悲しみそのものような声で言つた。「あの人代用品か?」

「違うわよ。何を言つてゐの?」

「じゃあ、なんだ」

「あなたはあなたよ」

「お前にとつて、俺はなんだ」

「こつた、こつこつ言い合ひ、どれくら櫛繰り返したらいいの?」

「答えが出るまでだる!」

「じゃあ……」ともう訳がわからなくなる。「じゃあ言つ。あなたはただの体よ。黙つて私を抱いていてくれればいいのよ。それだけよ。それ以上何も望まない。黙つて! 何も聞かないで! 私を問いつめないで! 黙つてそのまま抱いていてくれたらしいの。そうよ。私が求めてるのはあなたの体よ。それだけよ。それだけよそれだけよ。悪い?」

「じゃあ、俺も、お前の体だけを求めていいのか。それで平氣なのか?」

「平氣よ。どうぞ。そのほうが気が楽だわ」

「どうこつことか、わかってるのか?」

「バカにしないで。どう? これからX通りのホテルにでも行く?」

「私はかまわないわよ」

「そんなどこ、行ったことあるのか？」

「入ったことはない。さっき前を通ったの。一時間いへりつて書いてたわ。一人合わせたら、お金、そのくらいあるでしょう。行こうよ、さあ」

「本気か？」

「本気よ。それとも出来ないの？ 私だつてあなたが初めてなのよ。

「怖いの？」

「怖いんじゃない」

「だつたら、何？」

「感情的になつてゐんだつたら……」

「感情的になれて言つたのは、誰？」

「そういう言い方はしてないだろ」

「どうだつていいわ。行くの？ よすの？」

「じゃあ行こう」と祐二は力なく言つた。

生理はおととい終わつたから……と感情的な言ひ合ひの裏で冷た
い計算を始めている自分に気づく。

*

これほど悪趣味な部屋は、見たことがない。
ピンク、赤、緑で埋め尽くされた壁。

毒々しいくらい。

座り心地最悪の椅子。

座るな、と言わんばかり。

タバコで焦げたテーブル。

ものを置くな、といいたげに。

それに、ベッドの回りになぜこんなに鏡が多いのか。
シャワーを浴びようにも、着替えの部屋がない。

トイレでホテルのロップに着替えようとする。

トイレに鍵がない。

洗面所に着替えを置き、髪を上げ、シャワーを浴びる。

排水口に様々な色の髪の毛が溜まつている。

気分はもう、最悪。

でも、いいかもしない。

こういう場所で汚されるのも。

そうだ、私は捨てられたのだから。

あの男に。

そう思つと何か気分が楽になつた。

私は捨てられた女。

ここで少しでも汚れ、あの女の子に近くなれば、あの男がまた帰

つてくるような気さえする。

ここであのつまらぬ男に汚されれば、私はあの女の子に会いに行ける。

対等に口がきける。

と、そんな気もする。

彩花が汚そうとして汚せなかつた細部を丁寧に清める。

今日は汚れますようこと、おまじないのよつ。

*

祐一がシャワーを浴びてゐる。

天井の鏡に写つた自分の顔を眺めながら、だんだんと浮ついた気持ちになつてくる。

怖い。本当に怖い。

でも、楽しみ。

何が起るのか楽しみ。

罪悪感、恐怖、嫌悪さえ、今は、甘美。

*

祐一が照明を一つづつ消すと、真っ暗になつた。

ピンをはずし、髪を下ろした。

*

抱かれ、キスされる。

暗闇の中。

すべて「……される」と言える、徹底的な受動。

体だけが、感覚だけがある。

これほど陶酔するとは思わなかつた。

どこも醒めてない。

すべてが火照り、触れられるのを待つてゐる。

汚れるどころじやない。

触れられたところが一つづつ目覚めていく。

そう。

目覚める。

知らなかつた感覚。

感じる。

思い切り声を上げる。

彩花、タオルを噛ませてかわいそつたな。

……あなたのはただの性欲よ……

彩花はそう言つた。

……あなただつてそつじやない……

今ならそつ言い返すだろ？

ただ、ただ、感覚に気持ちを集中した。

祐一が終わつたのに氣づかなかつた。

「すまん」と祐一はばつが悪そつに言つた。

「何が？」

「満足できなかつたる」

「ううん。すゞく満足したよ。あなたは？」

「うん」

「よかつた。私だけ感じてたんじやないかつて、心配したの。ねえ、
しばらく抱いてて。いいでしょ？」

満ち足りた気持ちでキスをねだつた。
返つてきたのは硬いキスだつた。

「私のこと、好き？」

「嫌いなら、こんなところにこない」
いつか私が言つた科白だつた。

それがこれほど冷たく響く言葉だったときは。

初めて気づいた。

「じめんなさい」

「何が？」

「意地悪なことばかり言つて」

「うん」

「これからも、抱いてくれる？」

返事はない。

「ねえ」

「抱くよ」

もう一度、キスを交わした。
やつぱり硬かつた。

*
電気をつけると、シーツは、毎月の血とは違う鮮血にまだりに染められていた。

そつと鏡の中の自分を見た。
顔も胸も血まみれだった。
見れば、もう、全身が血まみれなのだつた。
祐一もそれに気づき、血まみれの口元で笑んで見せた。
まるで地獄の鬼のよつた。

*
氣絶しそうなほど恐怖。
氣絶さえ許されない嫌悪。

叫びながら裸のまま、すべてから逃げて走り出したかつた。
あの地獄絵の亡者のよつた。
本当に罰が当たつた。
私はノゴギリで裂かれた。
裂いたのは誰と、誰？

*

「見ないで！」とシーツを引き剥がし、それを持ってバスルームへ

と走った。

*

私のあとでシャワーを浴び、服を着た祐一を見て、強烈な後悔が湧いてきた。

こんな男だつたのか。

こんな男にすべてを任せ、血まみれになりながら感じていたのか。そして思った。

自分は誰に抱かれているつもりだつたのか？

あの男？

ちがう。

「あなたのはただの性欲よ

愕然とした。

声も出ない。

汚れた。

血だけではなく、汚れた。

*

祐一も同じように後悔しているのかも知れなかつた。だからあれほどキスが硬かつたのだ。

*

シーツを洗つていたら、一時間料金を一時間も超過していた。もう祐一とは一度とないだらうと思つた。

(続く)

一九

ホテルを出るともう暗かつた。

あたりにはホテルに入る前とは見違えるばかりにネオンが輝き、昼間歩いた通りにはあのとき出会ったような女性たちが何人も出て、椅子に座つたり、立ち話したり、あるいは通りをぼうつと眺めていた。ところが男というものが現れるや、まるで餌を見つけた肉食獣のように走り群がり、嬌声を上げながら袖を引き、鞄を引き、自分の巣の中へ引きずり込もうと猛烈な争いを始めるのだった。

こういう場所なのだ。

私が血まみれの処女を捨てたのは。

そしてふと見れば、くすのき荘まで一本道だつた。

「私、寄つていくところがあるから」

「どこに?」

と祐一は氣弱そうに言つた。一人で取り残されるのが怖かつたのだろう。

「親戚の所。すぐそこなの」

「大丈夫?」

「女は大丈夫よ。あなたこそ氣をつけて。じゃあ

そう言つて、返事も聞かず、自転車に乗る。

祐一のそばを離れたい。

一刻も早く。

それに、今なら会える、きっと会える、と思つた。

* 一階のあの部屋に明りが見えた。

*

「はい」と、かわいい、けれど大人の声がして、戸が開けられた。私の顔を見て、未知子さんの顔は引きつり、全身は凍り付いた。

私も同じだつた。

いつたい私は何をしにここに来たんだらう。

なんと言えばいいのか。

何も考えてなかつた。

祐一から離れたい一心で、勢いで、ここまで来てしまつただけ。

泣きたい。

泣けない。

*

「御祖母様、大丈夫ですか」と未知子さんはやうと声を出した。

「意識は戻りました」と私もやつと言つた。

「入ります? 狹くて汚いですけど」

「いいですか?」

*

部屋に入る。

靴箱には信じられないほど派手な靴。

台所つきの一部屋。

玄関の上がすぐに部屋になつてゐる。

座布団が出される。

冬はコタツになるようなぢやぶ台で向き合つ。

私の部屋より狭い。

狭いけど、綺麗に片付けられていて、汚くはない。

可愛い食器棚の上に四つ、箱に入つた小さなお地蔵さんがならん

でいる。

私がそれを見たのに氣づくと、未知子さんはジッとうつむいてしまつ。

いつたい、私は何しに来たんだらう。

わたしがここにいるだけでこの人は苦痛なのだ。

ではこのまま帰つたらしいのか。

今となつてはそのほうが変だらう。

何か用事を見つけなければ。

お金の話は変だ。

あの男の話など論外だらう。

何をしに、私は来たのだらう。

会わない方がいい、と男が言つたのは、その通りだつた。

*

「ありがとうございました」と未知子さんは言つた。

「はい?」と何のことかわからず、聞き返した。

「お金です。あんなにたくさん」

「祖母が決めたんですね」

「ありがとうございました」と深々と頭を下げる。

また沈黙。

「御祖母様の具合は?」と未知子さん。

「意識はもどつてます。まだ話せるよつた状態ではありますんけど」

「心配ですね」

「はい」

また沈黙。

「お嬢さん」と未知子さんは顔を上げた。真正面から見られた。目元が私に似ている。これは祖母の目だ。

「はい」

「今日は、どうして?」

黙つていても仕方ないと思つた。

「清一さんがいなくなつたの、知つてますか?」

「せえいっちゃん?」と子供みたいな口調だつた。

「清一さん」と私は繰り返した。

「来るよ」とあつけない口調で。「今日の八時。だからもうすぐここに」

「え?」

「そこの荷物、清一ちゃんのよ」

見れば、女性の部屋には不似合いな登山用の大きなリュックが置いてある。

「ここに来て、荷物を受け取って、それから消えるのか……」

「どこに行くのか、知っています?」

「しばらくもぐるんだって」

「え?」

「地下に」

「地下にもぐる?」

「何を言つてこるのかわからぬ。」

「清一ちゃんのこと、好き?」と、突然。

「そんな、考えたこともないです」

嘘だつた。

今もそのことを考えていたのだった。

「私は大好き。やさしいから」

「やさしい……」

「うん」

「どんなところがやさしいんですか?」

「清一ちゃんは殴らない」

「殴らない?」

「そんなのあたりまえじゃないか、と思つ。」

「お嬢さんのことば、殴るの? 清一ちゃん」と心から心配そうな

口調で聞いてくる。

「いいえ、そんな!」と強く否定する。

「でしょ、だから大好き」

「未知子さんは、男の人に殴られたことあるんですか?」

「え?」と、未知子さんは一瞬惚けた顔になる。「男はみんな殴るよ。殴らないのは清一ちゃんくら」

「どうして」

「だって、私バカだから」と、何の問題もない、と言つた口調で。

「そんなこと……」

「ううん。きっとバカだから殴るのよ。だって、お嬢さんは殴られないとんでもないんでしょ?」

「殴られるなんて……」

想像も出来ない。

「ほらねえ。頭のいい人は殴られないんだ。お嬢さんは頭がいいし、綺麗だから、男も殴ろうとは思わないんだよ。普通、女は殴られるんだよ。特にね、私のように、バカで、ブスな、女はね、挨拶がわりに殴られるんだ」

「そんなこと、ないとと思つ」

「ううん。だつて、ほら、こここのアザ」と未知子さんは右の二の腕を見せる。

薄い赤黒いアザ。

「半年も前なのに、まだ残つてゐる。前の男に殴られて、ええと、これ、なんで殴られたんだつたかなあ」
だんだん、話すのが苦痛になつてくる。早く八時になればいいのに、と思い、時計を見る。

八時をもう三分、過ぎてゐる。

「清一さん」と話をかえる。「来ないですね」

「来るよ」と平然と。」「約束したから。清一ちゃんは、私との約束をやぶつたこと、ないよ。あ、清一ちゃんに用だつたの?」
答えられない。

あの男にどんな用があるといつたのだろう。
たつた今、自らの処女の血に、祐一とふたり、まみれあつたというのに。

どうかしていた。

本当に。

こんなことで処女でなくなつていいいのか。

そうだ、自分はもう処女ではないのだ。
すべてを知つてしまつたのだ。

愛を交わすとか、愛を確かめるとか、そういう言葉の本当の意味
を、この体で知つてしまつたのだ。
しかも、一片の愛もなく。

しかも、自ら悦びつつ。

どんな顔をして、あの男に会つ?

どんな顔を?

「やつぱり好きなんだ、清一ちゃんの」と、未知子さんは私の顔をジット、失礼なくらい、のぞき込んで呟つ。

顔には、あの薄ら笑いが浮かんでいる。

「抱かれたんだあ」とこきなり言つ。

ギヨシとして、誰に? と聞き返しやつになり、首を横に振る。ぶんぶん振る。

色々な想いが湧いてきて、口を開くと泣きだしあうだ。

*

「抱いてもらえばいいの」。上手こつて感じじゃないけど、すくべやさしいよ、清一ちゃん

「そんな」

「お嬢さんのほうが清一ちゃんもいこと懶つよ。だつて、こんなに綺麗だし、スタイルもいいし、きっと抱きがいがあるよ。それに清一ちゃんインテリだから、お嬢さんのような頭のいい人の方がいいに決まつてゐよ。もちろん、そうなつたら、私、身を引くからね。約束するよ。お嬢さんが相手じや仕方ないよ、私のようなバカじや、もともと清一ちゃんにつりあわないから、お嬢さんの方が……」「そんなんじやー」と思わず強く言つてしまつ。

「じめん……」と、氣の毒なくらい、縮み上がる。

また沈黙。

*

「おとうじやん」と未知子さん。「やせしかつた?」

「憶えてる範囲では、やせしかつたと思ひます」

「やせしかつたよね」と声が弾んでいる。

私との女性とは、きょううだいなのだ、と思いつく。

なぜ今まで忘れていたのだろう。

あの男のことで頭がいっぱいだつたのか。

「お祖母さんも優しいでしょう?」と未知子さん。

「はい」

「家の人気がいるときはダメだっただけど、お祖母さんだけのときは、
上にあげてくれたのよ、私を。さあ、お線香上げなさいって、御仏
壇の前に。うれしかった。こんなバカで、汚い女を、お屋敷にあげ
てくれるなんて、うれしかった。こんど倒れたって聞いて、病院に
飛んでいきたかった。でも迷惑だから、こんな女が行つたら、迷惑
だから、行かなかつたんだ。お嬢さんが来てくれて、よかつた。お
祖母さん、長生きしてくださいって、私のかわりに言つてね」

「未知子さんがあれを言つていたって、ちゃんと伝えます」

「ありがとう」

また沈黙があつた。けれど、お互ひを確かめ合ひような、柔らか
な沈黙だった。

この人と私は姉妹なのだ。

*

戸が、尋常でない叩き方で打たれた。
来た、と思った。

全身の血が逆流した。

未知子さんは平然とした口調で、

「あ、清一ちゃん来たね」

と立ち上がつた。

「珍しいお客様よお」などと言いながら鍵を開ける。
恐ろしくて玄関の方を見られない。

きや、と小さな声。

ドサリ、と倒れ込む音。

這うよつに男が上がつてくると、玄関から畳にかけて血の筋がで
かる。

私も未知子さんも、声も出ない。

「來てたのか」と私を見つけてちやぶ台に肘で起きあがり、うつぶ
せて言った。「早かつたな」

「どう、したの？」

「待ち伏せだつた。例の女の子の復讐のつもりが、情報が漏れてた。
向こうにも、権力にも」

「復讐？」

「あんたも見たろう。あれは絶対にやつらの仕業だ」

そういうながら首をもたげると、男は激しく咳きこんだ。

口から血が、まるで映画かテレビの場面のように噴き出した。

ちやぶ台に小さな紅い、泡立つ水たまりがいくつもできた。

「折れた肋骨が、肺を傷つけたな」と、手の甲で口元の血を拭いながら冷静な口調で言つた。

「せえいっちやーん！」と、やつと正気に返つた未知子さんはかけより、背中から抱きかかえて男の肩を激しく揺さぶつた。

男は見たことのない苦悶の表情をした。

「やめて！ 動かさないで」と私は激しい口調で言つた。『「まず救急車でしょ！」

それでも未知子さんは、

「ギヤーッ」と叫びながら男を揺さぶつ続ける。

「やめて！ やめなさい！」と私は未知子さんの肩を持つて引き剥がさなければならなかつた。

未知子さんの手を離れ、男は畳にゴロリ、と横になつた。畳に血が、ポツ、ポツ、と落ちた。

「せえいっちやーん」と未知子さんは畳にペタリと座りこみ、子供のような本気の号泣を始めた。『「わたし、どうしたらいいの、どうしたらしいの、お、おねがい、せえいっちやーん、死なないでよお』

お

「救急車の前に、警察が来るさ。待つてりやいー

男は寝たまま言つた。

「そんな」と私。

「お嬢さんは、帰れ。」「いらっしゃりや、迷惑だ

「そんな……」

「あなたは、ここにいていい人じゃない。帰れ」

「せえいつちゃん、わたし、どお、どおしたらいのよ」

「未知子、いいから、お嬢さんを帰せ」

遠くにパトカーのサイレンの音がする。
だんだん近づいてくる。

死に神のようだ。

……来ないで、お願ひ！

気が遠くなる。

すべてが見えていて見えないような。

*

二人が叫んでいる。

我に返る。

「帰れ、お嬢さん、帰れ」

「帰つて！ ねえ、おねがい！」

私はここでも余所者なのだ、と気づく。

*

余所者は、私、ここに来て、
余所者のまま、去つていく。

(続く)

—〇—

家の玄関で、左の靴が、男の血に汚れているのに気づいた。ハンカチで拭き、大事なもののように折り畳んでポケットにしました。

*

キッチンに母。

「どこに行つてたの?」

「どこだつて……」

「いいわけないでしょう! お祖母ちゃんに聞いたわよ、あんた、あんた、アンタア!」

母親の発作の始まりを眺めながら、ふと気づいた。

みんなひとりなのだ。

ひとりで生きていくしかないのだ。

私一人がひとりなのではない。

母も、祖母も、未知子さんも、祐一も、彩花も。

そしてあの男も。

この世では、みんな、ひとりなのだ。

……ポケットの中のハンカチを、しつかりと握りしめる。

ひとりたちは、ひとり同士、血の鎖でつながるしかないのだ……。

*

もう夏休みが終わる。

私の夏が終わる。

これまででいちばん美しかった、残虐なほど美しかった、私の夏が。

了

向きかな、と。時代は昭和40年代、まだ若者が政治的に熱かつた時代です。戦前の価値観と新しい価値観のせめき合いの中で、時代に翻弄されながらそれぞれの青春を生きた若者達の物語、楽しんでいただけましたでしょうか。これほど極端ではないにせよ、あの時代にはあの時代特有の激しさがありました。今となつては夢のまた夢、ですが。それではまだどこかでお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0825d/>

死と乙女

2010年10月8日15時34分発行